生まれいずる悩み

有島武郎

一

私は自分の仕事を神聖なものにしようとしていた。ねじ曲がろうとする自分の心をひっぱたいて、できるだけ伸び伸びしたまっすぐな明るい世界に出て、そこに自分の芸術の宮殿を築き上げようともがいていた。それは私にとってどれほど喜ばしい事だったろう。と同時にどれほど苦しい事だったろう。私の心の奥底には確かに――すべての人の心の奥底にあるのと同様な――火が燃えてはいたけれども、その火を燻（いぶ）らそうとする塵芥（ちりあくた）の堆積（たいせき）はまたひどいものだった。かきのけ

てもかきのけても容易に火の燃え立って来ないような瞬間には私はみじめだった。私は、机の向こうに開かれた窓から、冬が来て雪にうずもれて行く一面の畑を見渡しながら、滞りがちな筆をしかりつけしかりつけ運ばそうとしていた。

寒い。原稿紙の手ざわりは氷のようだった。

陽（ひ）はずんずん暮れて行くのだった。灰色からねずみ色に、ねずみ色から墨色にぼかされた大きな紙を目の前にかけて、上から下へと一気に視線を落として行く時に感ずるような速さで、昼の光は夜の闇（やみ）に変わって行こうとしていた。午後になったと思うまもなく、ど

んどん暮れかかる北海道の冬を知らないものには、日がいち早く蝕(むしば)まれるこの気味悪いさびしさは想像がつくまい。ニセコアンの丘陵の裂け目からまっしぐらにこの高原の畑地を目がけて吹きおろして来る風は、割合に粒の大きい軽(かろ)やかな初冬の雪片をあおり立てあおり立て横ざまに舞い飛ばした。雪片は暮れ残った光の迷子(まいご)のように、ちかちかした印象を見る人の目に与えながら、いたずら者らしくさんざん飛び回った元気にも似ず、降りたまった積雪の上に落ちるや否や、寒い薄紫の死を死んでしまう。ただ窓に来てあたる雪片だけがさらさらさらさらとささやかに音を立てるばか

りで、他のすべてのやつらは残らず唖だ。快活らしい白い唖の群れの舞踏──それは見る人を涙ぐませる。

私はさびしさのあまり筆をとめて窓の外をながめてみた。そして君の事を思った。

二

私が君に始めて会ったのは、私がまだ札幌に住んでいるころだった。私の借りた家は札幌の町はずれを流れる豊平川という川の右岸にあった。その家は堤の下の一町歩ほどもある大きなりんご園の中に建ててあっ

た。

　そこにある日の午後君は尋ねて来たのだった。君は少しふきげんそうな、口の重い、癇(かん)で背たけが伸び切らないといったような少年だった。きたない中学校の制服の立て襟(えり)のホックをうるさそうにはずしたままにしていた、それが妙な事にはことにはっきりと私の記憶に残っている。

　君は座につくとぶっきらぼうに自分のかいた絵を見てもらいたいと言い出した。君は片手ではかかえ切れないほど油絵や水彩画を持ちこんで来ていた。君は自分自身を平気で虐(しいた)げる人のように、ふろしき包みの

中から乱暴に幾枚かの絵を引き抜いて私の前に置いた。そしてじっと探るように私の顔を見つめた。明（あか）らさまに言うと、その時私は君をいやに高慢ちきな若者だと思った。そして君のほうには顔も向けないで、よんどころなくさし出された絵を取り上げて見た。

　私は一目見て驚かずにはいられなかった。少しの修練も経てはいないし幼稚な技巧ではあったけれども、その中には不思議に力がこもっていてそれがすぐ私を襲ったからだ。私は画面から目を放してもう一度君を見直さないではいられなくなった。で、そうした。その時、君は不安らしいそのくせ意地っぱりな目つきを

して、やはり私を見続けていた。

「どうでしょう。それなんかはくだらない出来だけれども」

そう君はいかにも自分の仕事を軽蔑するように言った。もう一度明らさまに言うが、私は一方で君の絵に喜ばしい驚きを感じながらも、いかにも思いあがったような君の物腰には一種の反感を覚えて、ちょっと皮肉でも言ってみたくなった。「くだらない出来がこれほどなら、会心の作というのはたいしたものでしょうね」とかなんとか。

しかし私は幸いにもとっさにそんな言葉で自分を穢

すことをのがれたのだった。それは私の心が美しかったからではない。君の絵がなんといっても君自身に対する私の反感に打ち勝って私に迫っていたからだ。

君がその時持って来た絵の中で今でも私の心の底にまざまざと残っている一枚がある。それは八号の風景にかかれたもので、軽川（かるがわ）あたりの泥炭地（でいたんち）を写したと覚しい晩秋の風景画だった。荒涼と見渡す限りに連なった地平線の低い葦原（あしはら）を一面におおうた霙雲（みぞれぐも）のすきまから午後の日がかすかに漏れて、それが、草の中からたった二本ひょろひょろと生（お）い伸びた白樺（しらかば）の白い樹皮を力弱く照らしていた。単色を含んで来た筆の穂が不

器用に画布にたたきつけられて、そのままけし飛んだような手荒な筆触で、自然の中には決して存在しないと言われる純白の色さえ他の色と練り合わされずに、そのままべとりとなすり付けてあったりしたが、それでもじっと見ていると、そこには作者の鋭敏な色感が存分にうかがわれた。そればかりか、その絵が与える全体の効果にもしっかりとまとまった気分が行き渡っていた。悒鬱（ゆううつ）——十六七の少年には哺（はぐく）めそうもない重い悒鬱を、見る者はすぐ感ずる事ができた。

「たいへんいいじゃありませんか」

絵に対して素直（すなお）になった私の心は、私にこう言わさ

ないではおかなかった。

それを聞くと君は心持ち顔を赤くした――と私は思った。すぐ次の瞬間に来ると、君はしかし私を疑うような、自分を冷笑(あざわら)うような冷ややかな表情をして、しばらくの間私と絵とを等分に見くらべていたが、ふいと庭のほうへ顔をそむけてしまった。それは人をばかにした仕打ちとも思えば思われない事はなかった。二人は気まずく黙りこくってしまった。私は所在なさに黙ったまま絵をながめつづけていた。

「そいつはどこん所が悪いんです」

突然また君の無愛想な声がした。私は今までの妙に

ちぐはぐになった気分から、ちょっと自分の意見をずばずばと言い出す気にはなれないでいた。しかし改めて君の顔を見ると、言わさないじゃおかないぞといったような真剣さが現われていた。少しでもまに合わせを言おうものなら軽蔑してやるぞといったような鋭さが見えた。よし、それじゃ存分に言ってやろうと私もとうとうほんとうに腰をすえてかかるようにされていた。

その時私が口に任せてどんな生意気を言ったかは幸いな事に今はおおかた忘れてしまっている。しかしとにかく悪口としては技巧が非常にあぶなっかしい事、

自然の見方が不親切な事、モティヴが耽情的（たんじょうてき）過ぎる事などをならべたに違いない。君は黙ったまままじまじと目を光らせながら、私の言う事を聞いていた。私が言いたい事だけをあけすけに言ってしまうと、君はしばらく黙りつづけていたが、やがて口のすみだけに始めて笑いらしいものを漏らした。それがまた普通の微笑とも皮肉な痙攣（けいれん）とも思いなされた。

それから二人はまた二十分ほど黙ったままで向かい合ってすわりつづけた。

「じゃまた持って来ますから見てください。今度はもっといいものをかいて来ます」

その沈黙のあとで、君が腰を浮かせながら言ったこれだけの言葉はまた僕を驚かせた。まるで別な、初（うぶ）な、素直な子供でもいったような無邪気な明るい声だったから。

不思議なものは人の心の働きだ。この声一つだった。この声一つが君と私とを堅く結びつけてしまったのだった。私は結局君をいろいろに邪推した事を悔いながらやさしく尋ねた。

「君は学校はどこです」

「東京です」

「東京？　それじゃもう始まっているんじゃないか」

「ええ」
「なぜ帰らないんです」
「どうしても落第点しか取れない学科があるんでいやになったんです。……それから少し都合もあって」
「君は絵をやる気なんですか」
「やれるでしょうか」
そう言った時、君はまた前と同様な強情らしい、人に迫るような顔つきになった。
私もそれに対してなんと答えようもなかった。専門家でもない私が、五六枚の絵を見ただけで、その少年の未来の運命全体をどうして大胆にも決定的に言い切

る事ができよう。少年の思い入ったような態度を見るにつけ、私にはすべてが恐ろしかった。私は黙っていた。

「僕はそのうち郷里に——郷里は岩内です——帰ります。岩内のそばに硫黄を掘り出している所があるんです。その景色を僕は夢にまで見ます。その絵を作り上げて送りますから見てください。……絵が好きなんだけれども、下手だからだめです」

私の答えないのを見て、君は自分をたしなめるように堅いさびしい調子でこう言った。そして私の目の前に取り出した何枚かの作品をめちゃくちゃにふろしき

に包みこんで帰って行ってしまった。

　君を木戸の所まで送り出してから、私はひとりで手広いりんご畑の中を歩きまわった。りんごの枝は熟した果実でたわわになっていた。ある木などは葉がすっかり散り尽くして、赤々とした果実だけが真裸で累々と日にさらされていた。それは快く空の晴れ渡った小春びよりの一日だった。私の庭下駄（にわげた）に踏まれた落ち葉はかわいた音をたてて微塵（みじん）に押しひしゃがれた。豊満のさびしさというようなものが空気の中にしんみりと漂っていた。ちょうどそのころは、私も生活のある一つの岐路に立って疑い迷っていた時だった。私は冬を

目の前に控えた自然の前に幾度も知らず知らず棒立ちになって、君の事と自分の事とをまぜこぜに考えた。とにかく君は妙に力強い印象を私に残して、私から姿を消してしまったのだ。

その後君からは一度か二度問い合わせか何かの手紙が来たきりでぱったり消息が途絶えてしまった。岩内から来たという人などに邂逅（あ）うと、私はよくその港にこういう名前の青年はいないか、その人を知らないかなぞと尋ねてみたが、さらに手がかりは得られなかった。硫黄（いおう）採掘場（さいくつば）の風景画もとうとう私の手もとには届いて来なかった。

こうして二年三年と月日がたった。そしてどうかした拍子に君の事を思い出すと、私は人生の旅路のさびしさを味わった。一度とにかく顔を合わせて、ある程度まで心を触れ合ったどうしが、いったん別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未来永劫（えいごう）また邂逅（めぐりあ）わない……それはなんという不思議な、さびしい、恐ろしい事だ。人とは言うまい、犬とでも、花とでも、塵（ちり）とでもだ。孤独に親しみやすいくせにどこか殉情的で人なつっこい私の心は、どうかした拍子に、このやむを得ない人間の運命をしみじみと感じて深い悒鬱（ゆううつ）に襲われる。君も多くの人の中で私にそんな心持

ちを起こさせる一人だった。

　しかも浅はかな私ら人間は猿と同様に物忘れする。四年五年という歳月は君の記憶を私の心からきれいにぬぐい取ってしまおうとしていたのだ。君はだんだん私の意識の閾を踏み越えて、潜在意識の奥底に隠れてしまおうとしていたのだ。

　この短からぬ時間は私の身の上にも私相当の変化をひき起こしていた。私は足かけ八年住み慣れた札幌――ごく手短に言っても、そこで私の上にもいろいろな出来事がわき上がった。妻も迎えた。三人の子の父ともなった。長い間の信仰から離れて教会とも縁を切っ

た。それまでやっていた仕事にだんだん失望を感じ始めた。新しい生活の芽が周囲の拒絶をも無(な)みして、そろそろと芽ぐみかけていた。私の目の前の生活の道にはおぼろげながら気味悪い不幸の雲がおおいかかろうとしていた。私は始終私自身の力を信じていいのか疑わねばならぬかの二筋道に迷いぬいた――を去って、私には物足らない都会生活が始まった。そして、目にあまる不幸がつぎつぎに足もとからまくし上がるのを手をこまねいてじっとながめねばならなかった。心の中に起こったそんな危機の中で、私は捨て身になって、見も知らぬ新しい世界に乗り出す事を余儀なくされた。

それは文学者としての生活だった。私は今度こそは全くひとりで歩かねばならぬと決心の臍(ほぞ)を堅めた。またこの道に踏み込んだ以上は、できてもできなくても人類の意志と取り組む覚悟をしなければならなかった。私は始終自分の力量に疑いを感じ通しながら原稿紙に臨んだ。人々が寝入って後、草も木も寝入って後、ひとり目ざめてしんとした夜の寂寞(せきばく)の中に、万年筆のペン先が紙にきしり込む音だけを聞きながら、私は神がかりのように夢中になって筆を運ばしている事もあった。私の周囲には亡霊のような魂がひしめいて、紙の中に生まれ出ようと苦しみあせっているのをはっきり

と感じた事もあった。そんな時気がついてみると、私の目は感激の涙に漂っていた。芸術におぼれたものでなくって、そういう時のエクスタシーをだれが味わい得よう。しかし私の心が痛ましく裂け乱れて、純一な気持ちがどこのすみにも見つけられない時のさびしさはまたなんと喩（たと）えようもない。その時私は全く一塊の物質に過ぎない。私にはなんにも残されない。私は自分の文学者である事を疑ってしまう。文学者が文学者である事を疑うほど、世に空虚なたよりないものがまたとあろうか。そういう時に彼は明らかに生命から見放されてしまっているのだ。こんな瞬間に限っていつ

でもきまったように私の念頭に浮かぶのは君のあの時の面影だった。自分を信じていいのか悪いのかを決しかねて、たくましい意志と冷刻な批評とが互いに衷(うち)に戦って、思わず知らずすべてのものに向かって敵意を含んだ君のあの面影だった。私は筆を捨てて椅子(いす)から立ち上がり、部屋(へや)の中を歩き回りながら、自分につぶやくように言った。

「あの少年はどうなったろう。道を踏み迷わないでいてくれ。自分を誇大して取り返しのつかない死出の旅をしないでいてくれ。もし彼に独自の道を切り開いて行く天稟(てんぴん)がないのなら、どうか正直な勤勉な凡人とし

て一生を終わってくれ。もうこの苦しみはおれ一人だけでたくさんだ」

　ところが去年の十月――と言えば、川岸の家で偶然君というものを知ってからちょうど十年目だ――のある日雨のしょぼしょぼと降っている午後に一封の小包が私の手もとに届いた。女中がそれを持って来た時、私は干し魚が送られたと思ったほど部屋の中が生臭くなった。包みの油紙は雨水と泥(どろ)とでひどくよごれていて、差出人の名前がようやくの事で読めるくらいだったが、そこにしるされた姓名を私はだれともはっきり思い出すことができなかった。ともかくもと思って私

はナイフでがんじょうな渋びきの麻糸を切りほごしにかかった。油紙を一皮めくるとその中にまた麻糸で堅く結わえた油紙の包みがあった。それをほごすとまた油紙で包んであった。ちょっと腹の立つほど念の入った包み方で、百合（ゆり）の根をはがすように一枚一枚むいて行くと、ようやく幾枚もの新聞紙の中から、手あかでよごれ切った手製のスケッチ帳が三冊、きりきりと棒のように巻き上げられたのが出て来た。私は小気味悪い魚のにおいを始終気にしながらその手帳を広げて見た。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帳だった。そ

してどれにも山と樹木ばかりが描かれてあった。私は一目見ると、それが明らかに北海道の風景である事を知った。のみならず、それは明らかにほんとうの芸術家のみが見うる、そして描きうる深刻な自然の肖像画だった。

「やっつけたな！」咄嗟（とっさ）に私は少年のままの君の面影を心いっぱいに描きながら下くちびるをかみしめた。そして思わずほほえんだ。白状するが、それがもし小説か戯曲であったら、その時の私の顔には微笑の代わりに苦（にが）い嫉妬（しっと）の色が濃くみなぎっていたかもしれない。

その晩になって一封の手紙が君から届いて来た。や

はり厚い画学紙にすり切れた筆で乱雑にこう走り書きがしてあった。

「北海道ハ秋モ晩（オソ）クナリマシタ。野原ハ、毎日ノヨウニツメタイ風ガ吹イテイマス。日ゴロ愛惜シタ樹木ヤ草花ナドガ、イツトハナク落葉シテシマッテイル。秋ハ人ノ心ニイイロナ事ヲ思ワセマス。日ニヨリマストアタリノ山々ガ浮キアガッタカト思ワレルクライ空ガ美シイ時ガアリマス。シカシタイテイハ風トイッショニ雨ガバラバラヤッテ来テ道ヲ悪クシテイルノデス。

昨日スケッチ帳ヲ三冊送リマシタ。イツカあなたニ絵ヲ見テモライマシテカラ故郷デ貧乏漁夫デアル私ハ、毎日忙シイ仕事ト激シイ労働ニ追ワレテイルノデ、ツイコトシマデ絵ヲカイテミタカッタノデスガ、ツイカケナカッタノデス。

コトシノ七月カラ始メテ画用紙ヲトジテ画帖（ガジョウ）ヲ作リ、鉛筆デ（モノ）ニ向カッテミマシタ。シカシ労働ニ害サレタ手ハ思ウヨウニ自分ノ感力ヲ現ワス事ガデキナイデ困リマス。

コンナツマラナイ素描帳ヲ見テクダサイト言ウノハタイヘンツライノデス。シカシ私ハイツワラナイデ

始メタ時カラノヲ全部送リマシタ。（中略）
私ノ町ノ知的素養ノイクブンナリトモアル青年デモ、
自分トイウモノニツイテ思イヲメグラス人ハ少ナイ
ヨウデス。青年ノ多クハ小サクサカシクオサマッテ
イルモノカ、ツマラナク時ヲ無為ニ送ッテイマス。
デスガ私ハ私ノ故郷ダカラ好キデス。
イロイロナモノガ私ノ心ヲオドラセマス。私ノス
ケッチニ取ルベキトコロノアルモノガアルデショウ
カ。
私ハナントナクコンナツマラヌモノヲあなたニ見テ
モラウノガハズカシイノデス。

山ハ絵ノ具ヲドッシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガッテイルヨウニカイテミタイモノダト思ッテイマス。私ノスケッチデハ私ノ感ジガドウモ出ナイデコマリマス。私ノ山ハ私ガ実際ニ感ジルヨリモアマリ平面ノヨウデス。樹木モドウモ物体感ニトボシク思ワレマス。

色ヲツケテミタラヨカロウト考エテイマスガ、時間ト金ガナイノデ、コンナモノデ腹イセヲシテイルノデス。

私ハイロイロナ構図デ頭ガイッパイニナッテイルノデスガ、ナニシロマダカクダケノ腕ガナイヨウデス。

オ忙シイあなたニコンナ無遠リョヲカケテタイヘンスマナク思ッテイマス。イツカオヒマガアッタラ御教示ヲ願イマス。

十月末」

こう思ったままを書きなぐった手紙がどれほど私を動かしたか。君にはちょっと想像がつくまい。自分が文学者であるだけに、私は他人の書いた文字の中にも真実と虚偽とを直感するかなり鋭い能力が発達している。私は君の手紙を読んでいるうちに涙ぐんでしまった。魚臭い油紙と、立派な芸術品であるスケッチ帳と、君の文字との間には一分（ぶ）のすきもなかった。「感力」

という君の造語は立派な内容を持つ言葉として私の胸に響いた。「山ハ絵ノ具ヲドッシリ付ケテ、山ガ地上カラ空ヘモレアガッテイルヨウニカイテミタイ」・・・山が地上から空にもれあがる・・・それはすばらしい自然への肉迫を表現した言葉だ。言葉の中にしみ渡ったこの力は、軽く対象を見て過ごす微温な心の、まねにも生み出し得ない調子を持った言葉だ。

「だれも気もつかず注意も払わない地球のすみっこで、尊い一つの魂が母胎を破り出ようとして苦しんでいる」

私はそう思ったのだ。そう思うとこの地球というも

のが急により美しいものに感じられたのだ。そう感ずるとなんとなく涙ぐんでしまったのだ。

そのころ私は北海道行きを計画していたが、雑用に紛れて躊躇（ちゅうちょ）するうちに寒くなりかけたので、もういっそやめようかと思っていたところだった。しかし君のスケッチ帳と手紙とを見ると、ぜひ君に会ってみたくなって、一徹にすぐ旅行の準備にかかった。その日から一週間とたたない十一月の五日には、もう上野駅から青森への直行列車に乗っている私自身を見いだした。

札幌（さっぽろ）での用事を済まして農場に行く前に、私は岩内にあてて君に手紙を出しておいた。農場からはそう遠

くもないから、来られるなら来ないか、なるべくなら
お目にかかりたいからと言って。
農場に着いた日には君は見えなかった。その翌日は
朝から雪が降りだした。私は窓の所へ机を持って行っ
て、原稿紙に向かって呻吟（しんぎん）しながら心待ちに君を待つ
のだった。そして渋りがちな筆を休ませる間に、今ま
で書き連ねて来たような過去の回想やら当面の期待や
らをつぎつぎに脳裏に浮かばしていたのだった。

三

　夕やみはだんだん深まって行った。事務所をあずかる男が、ランプを持って来たついでに、夜食の膳（ぜん）を運ぼうかと尋ねたが、私はひょっとすると君が来はしないかという心づかいから、わざとそのままにしておいてもらって、またかじりつくように原稿紙に向かった。大きな男の姿が部屋（へや）からのっそりと消えて行くのを、視覚のはずれに感じて、都会から久しぶりで来て見ると、物でも人でも大きくゆったりしているのに今さらながら一種の圧迫をさえ感ずるのだった。

　渋りがちな筆がいくらもはかどらないうちに、夕やみはどんどん夜の暗さに代わって、窓ガラスのむこう

は雪と闇(やみ)とのぼんやりした明暗(キャロスキュロ)になってしまった。自然は何かに気を障(さ)えだしたように、夜とともに荒れ始めていた。底力のこもった鈍い空気が、音もなく重苦しく家の外壁に肩をあてがってうんともたれかかるのが、畳の上にすわっていてもなんとなく感じられた。自然が粉雪をあおりたてて、所きらわずたたきつけながら、のたうち回ってうめき叫ぶその物すごい気配(けはい)はもう迫っていた。私は窓ガラスに白もめんのカーテンを引いた。自然の暴威をせき止めるために人間が苦心して創(つく)り上げたこのみじめな家屋という領土がもろく小さく私の周囲にながめやられた。

突然、ど、ど、ど……という音が――運動が（そういう場合、音と運動との区別はない）天地に起こった。さあ始まったと私は二つに折った背中を思わず立て直した。同時に自然は上歯を下くちびるにあてがって思いきり長く息を吹いた。家がぐらぐらと揺れた。地面からおどり上がった雪が二三度はずみを取っておいて、どっと一気に天に向かって、謀反（むほん）でもするように、降りかかって行くあの悲壮な光景が、まざまざと部屋（へや）の中にすくんでいる私の想像に浮かべられた。だめだ。待ったところがもう君は来やしない。停車場からの雪道はもうとうに埋まってしまったに違いないから。私

は吹雪（ふぶき）の底にひたりながら、物さびしくそう思って、また机の上に目を落とした。

筆はますます渋るばかりだった。軽い陣痛のようなものは時々起こりはしたが、大切な文字は生まれ出てくれなかった。こうして私にとって情けないもどかしい時間が三十分も過ぎたころだったろう。農場の男がまたのそりと部屋にはいって来て客来を知らせたのは。私の喜びを君は想像する事ができる。やはり来てくれたのだ。私はすぐに立って事務室のほうへかけつけた。事務室の障子をあけて、二畳敷きほどもある大囲炉裏の切られた台所に出て見ると、そこの土間に、一人の

男がまだ靴も脱がずに突っ立っていた。農場の男も、その男にふさわしく肥って大きな内儀さんも、普通な背たけにしか見えないほどその客という男は大きかった。言葉どおりの巨人だ。頭からすっぽりと頭巾のついた黒っぽい外套を着て、雪まみれになって、口から白い息をむらむらと吐き出すその姿は、実際人間という感じを起こさせないほどだった。子供までがおびえた目つきをして内儀さんのひざの上に丸まりながら、その男をうろんらしく見詰めていた。

君ではなかったなと思うと僕は期待に裏切られた失望のために、いらいらしかけていた神経のもどかしい

感じがさらにつのるのを覚えた。
「さ、ま、ずっとこっちにお上がりなすって」
農場の男は僕の客だというのでできるだけ丁寧にこういって、囲炉裏のそばの煎餅蒲団（せんべいぶとん）を裏返した。
その男はちょっと頭で挨拶（あいさつ）して囲炉裏の座にはいって来たが、天井の高いだだっ広い台所にともされた五分心（ごぶしん）のランプと、ちょろちょろと燃える木節（きぶし）の囲炉裏火とは、黒い大きな塊的（マッス）とよりこの男を照らさなかった。男がぐっしより湿った兵隊の古長靴（ふるながぐつ）を脱ぐのを待って、私は黙ったまま案内に立った。今はもう、この男によって、むだな時間がつぶされないように、

いやな気分にさせられないようにと心ひそかに願いながら。

部屋（へや）にはいって二人が座についてから、私は始めてほんとうにその男を見た。男はぶきっちょうに、それでも四角に下座にすわって、丁寧に頭を下げた。

「しばらく」

八畳の座敷に余るような鏽（さび）を帯びた太い声がした。

「あなたはどなたですか」

大きな男はちょっときまりが悪そうに汗でしとどになったまっかな額をなでた。

「木本（きもと）です」

「え、木本君⁉」

これが君なのか。私は驚きながら改めてその男をしげしげと見直さなければならなかった。疳(かん)のために背たけも伸び切らない、どこか病質にさえ見えた悒鬱(ゆううつ)な少年時代の君の面影はどこにあるのだろう。また落葉松(からまつ)の幹の表皮からあすこここにのぞき出している針葉の一本をも見のがさずに、愛撫(あいぶ)し理解しようとする、スケッチ帳で想像されるような鋭敏な神経の所有者らしい姿はどこにあるのだろう。地(じ)をつぶしてさしこをした厚衣(あつし)を二枚重ね着して、どっしりと落ち付いた君のすわり形は、私より五寸も高く見えた。筋肉で

盛り上がった肩の上に、正しくはめ込まれた、牡牛（おうし）のように太い首に、やや長めな赤銅色の君の顔は、健康そのもののようにしっかりと乗っていた。筋肉質な君の顔は、どこからどこまで引き締まっていたが、輪郭の正しい目鼻立ちの隈々（くまぐま）には、心の中からわいて出る寛大な微笑の影が、自然に漂っていて、脂肪気のない君の容貌（ようぼう）をも暖かく見せていた。「なんという無類な完全な若者だろう。」私は心の中でこう感嘆した。恋人を紹介する男は、深い猜疑（さいぎ）の目で恋人の心を見守らずにはいられまい。君の与えるすばらしい男らしい印象はそんな事まで私に思わせた。

「吹雪（ふぶ）いてひどかったろう」
「なんの。……温（ぬく）くって温くって汗がはあえらく出ました。けんど道がわかんねえで困ってると、しあわせよく水車番に会ったからすぐ知れました。あれは親身（しんみ）な人だっけ」
　君の素直な心はすぐ人の心に触れると見える。あの水車番というのは実際このへんで珍しく心持ちのいい男だ。君は手ぬぐいを腰から抜いて湯げが立たんばかりに汗になった顔を幾度も押しぬぐった。
　夜食の膳（ぜん）が運ばれた。「もう我慢がなんねえ」と言って、君は今まで堅くしていたひざをくずしてあぐらを

かいた。「きちようめんにすわることなんぞはあねえもんだから。」二人は子供どうしのような楽しい心で膳（ぜん）に向かった。君の大食は愉快に私を驚かした。食後の茶を飯茶わんに三杯続けさまに飲む人を私は始めて見た。

　夜食をすましてから、夜中まで二人の間に取りかわされた楽しい会話を私は今だに同じ楽しさをもって思い出す。戸外ではここを先途とあらしが荒れまくっていた。部屋（へや）の中ではストーブの向かい座にあぐらをかいて、癖のように時おり五分刈りの濃い頭の毛を逆さになで上げる男ぼれのする君の顔が部屋を明るくして

いた。君はがんじょうな文鎮（おもし）になって小さな部屋を吹雪（ふぶき）から守るように見えた。温（あたた）まるにつれて、君の周囲から蒸（む）れ立つ生臭い魚の香は強く部屋じゅうにこもったけれども、それは荒い大海を生々しく連想させるだけで、なんの不愉快な感じも起こさせなかった。人の感覚というものも気ままなものだ。

　楽しい会話と言った。しかしそれはおもしろいという意味ではもちろんない。なぜなれば君はしばしば不器用な言葉の尻（しり）を消して、曇った顔をしなければならなかったから。そして私も苦しい立場や、自分自身の迷いがちな生活を痛感して、暗い心に捕えられねばな

らなかったから。

その晩君が私に話して聞かしてくれた君のあれからの生活の輪郭を私はここにざっと書き連ねずにはおけない。

札幌（さっぽろ）で君が私を訪れてくれた時、君には東京に遊学すべき道が絶たれていたのだった。一時北海道の西海岸で、小樽（おたる）をすら凌駕（りょうが）してにぎやかになりそうな気勢を見せた岩内港は、さしたる理由もなく、少しも発展しないばかりか、だんだんさびれて行くばかりだったので、それにつれて君の一家にも生活の苦しさが加えられて来た。君の父上と兄上と妹とが気をそろえて水

入らずにせっせと働くにも係わらず、そろそろと泥沼(どろぬま)の中にめいり込むような家運の衰勢をどうする事もできなかった。学問というものに興味がなく、従って成績のおもしろくなかった君が、芸術に捧誓(ほうせい)したい熱意をいだきながら、そのさびしくなりまさる古い港に帰る心持ちになったのはそのためだった。そういう事を考え合わすと、あの時君がなんとなく暗い顔つきをして、いらいらしく見えたのがはっきりわかるようだ。君は故郷に帰っても、仕事の暇々には、心あてにしている景色でもかく事を、せめてもの頼みにして札幌(さっぽろ)を立ち去って行ったのだろう。

しかし君の家庭が君に待ち設けていたものは、そんな余裕の有る生活ではなかった。年のいった父上と、どっちかと言えば漁夫としての健康は持ち合わせていない兄上とが、普通の漁夫と少しも変わりのない服装で網をすきながら君の帰りを迎えた時、大きい漁場の持ち主という風（ふう）が家の中から根こそぎ無くなっているのをまのあたりに見やった時、君はそれまでの考えののんき過ぎたのに気がついたに違いない。充分の思慮もせずにこんな生活の渦巻（うずまき）の中に我れから飛び込んだのを、君の芸術的欲求はどこかで悔やんでいた。その晩、磯臭（いそくさ）い空気のこもった部屋（へや）の中で、枕（まくら）につきなが

ら、陥穽（おとしあな）にかかった獣のようないらだたしさを感じて、まぶたを合わす事ができなかったと君は私に告白した。そうだったろう。その晩一晩だけの君の心持ちをくわしく考えただけで、私は一つの力強い小品を作り上げる事ができると思う。

　しかし親思いで素直な心を持って生まれた君は、君を迎え入れようとする生活からのがれ出る事をしなかったのだ。詰（つ）め襟（えり）のホックをかけずに着慣れた学校服を脱ぎ捨てて、君は厚衣（あつし）を羽織る身になった。明鯛（すけそう）から鱈（たら）、鱈から鰊（にしん）、鰊から烏賊（いか）というように、四季絶える事のない忙（いそが）しい漁撈（ぎょろう）の仕事にたずさわりながら、

君は一年じゅうかの北海の荒波や激しい気候と戦って、さびしい漁夫の生活に没頭しなければならなかった。しかも港内に築かれた防波堤が、技師の飛んでもない計算違いから、波を防ぐ代わりに、砂をどんどん港内に流し入れるはめになってから、船がかりのよかった海岸は見る見る浅瀬に変わって、出漁には都合のいい目ぬきの位置にあった君の漁場はすたれ物同様になってしまい、やむなく高い駄賃（だちん）を出して他人の漁場を使わなければならなくなったのと、北海道第一と言われた鰊の群来（くき）が年々減って行くために、さらぬだに生活の圧迫を感じて来ていた君の家は、親子が気心をそろ

え力を合わして、命がけに働いても年々貧窮に追い迫られ勝ちになって行った。

親身（しんみ）な、やさしい、そして男らしい心に生まれた君は、黙ってこのありさまを見て過ごす事はできなくなった。君は君に近いものの生活のために、正しい汗を額に流すのを悔いたり恥じたりしてはいられなくなった。そして君はまっしぐらに労働生活のまっただ中に乗り出した。寒暑と波濤（はとう）と力わざと荒くれ男らとの交わりは君の筋骨と度胸とを鉄のように鍛え上げた。君はすくすくと大木のようにたくましくなった。

「岩内にも漁夫（りょうし）は多いども腕力（うでぢから）にかけておらにかな

うものは一人だっていねえ」
君はあたりまえの事を言って聞かせるようにこう言った。私の前にすわった君の姿は私にそれを信ぜしめる。
パンのために生活のどん底まで沈み切った十年の月日——それは短いものではない。たいていの人はおそらくその年月の間にそういう生活からはね返る力を失ってしまうだろう。世の中を見渡すと、何百万、何千万の人々が、こんな生活にその天授の特異な力を踏みしだかれて、むなしく墳墓の草となってしまったろう。それは全く悲しい事だ。そして不条理な事だ。し

かしだれがこの不条理な世相に非難の石をなげうつ事ができるだろう。これは悲しくも私たちの一人一人が肩の上に背負わなければならない不条理だ。特異な力を埋め尽くしてまでも、当面の生活に没頭しなければならない人々に対して、私たちは尊敬に近い同情をすらささげねばならぬ悲しい人生の事実だ。あるがままの実相だ。

パンのために精力のあらん限りを用い尽くさねばならぬ十年——それは短いものではない。それにもかかわらず、君は性格の中に植え込まれた憧憬（どうけい）を一刻も捨てなかったのだ。捨てる事ができなかったのだ。

雨のためとか、風のためとか、一日も安閑としてはいられない漁夫の生活にも、なす事なく日を過ごさねばならぬ幾日かが、一年の間にはたまに来る。そういう時に、君は一冊のスケッチ帳（小学校用の粗雑な画学紙を不器用に網糸でつづったそれ）と一本の鉛筆とを、魚の鱗（うろこ）や肉片がこびりついたまま、ごわごわにかわいた仕事着のふところにねじ込んで、ぶらりと朝から家を出るのだ。

「会う人はおら事気違いだというんです。けんどおら山をじっとこう見ていると、何もかも忘れてしまうです。だれだったか何かの雑誌で『愛は奪う』というも

のを書いて、人間が物を愛するのはその物を強奪（ふんだく）るだと言っていたようだが、おら山を見ていると、そんな気は起こしたくも起こらないね。山がしっくりおら事引きずり込んでしまって、おらただあきれて見ているだけです。その心持ちがかいてみたくって、あんな下手（へた）なものをやってみるが、からだめです。あんな山の心持ちをかいた絵があらば、見るだけでも見たいもんだが、ありませんね。天気のいい気持ちのいい日にうんと力こぶを入れてやってみたらと思うけんど、暮らしも忙（せわ）しいし、やってもおらにはやっぱり手に余るだろう。色もつけてみたいが、絵の具は国に引っ込む

時、絵の好きな友だちにくれてしまったから、おらのような絵にはまた買うのも惜しいし。海を見れば海でいいが、山を見れば山でいい。もったいないくらいそこいらにすばらしいいいものがあるんだが、力が足んねえです」

と言ったりする君の言葉も様子も私には忘れる事のできないものになった。その時はあぐらにした両脛（りょうすね）を手でつぶれそうに堅く握って、胸に余る興奮を静かな太い声でおとなしく言い現わそうとしていた。

私どもが一時過ぎまで語り合って寝床にはいって後も、吹きまく吹雪（ふぶき）は露ほども力をゆるめなかった。君

は君で、私は私で、妙に寝つかれない一夜だった。踏まれても踏まれても、自然が与えた美妙な優しい心を失わない、失い得ない君の事を思った。仁王(におう)のようなたくましい君の肉体に、少女のように敏感な魂を見いだすのは、この上なく美しい事に私には思えた。君一人が人生の生活というものを明るくしているようにさえ思えた。そして私はだんだん私の仕事の事を考えた。どんなにもがいてみてもまだまだほんとうに自分の所有を見いだす事ができないで、ややもするとこじれた反抗や敵愾心(てきがいしん)から一時的な満足を求めたり、生活をゆがんで見る事に興味を得ようとしたりする心の貧しさ

――それが私を無念がらせた。そしてその夜は、君のいかにも自然な大きな生長と、その生長に対して君が持つ無意識な謙譲と執着とが私の心に強い感激を起こさせた。

次の日の朝、こうしてはいられないと言って、君はあらしの中に帰りじたくをした。農場の男たちすらもう少し空模様を見てからにしろとしいて止めるのも聞かず、君は素足にかちんかちんに凍った兵隊長靴（ながぐつ）をはいて、黒い外套（がいとう）をしっかり着こんで土間に立った。北国の冬の日暮らしにはことさら客がなつかしまれるものだ。なごりを心から惜しんでだろう、農場の人たち

も親身（しんみ）にかれこれと君をいたわった。すっかり頭巾（ずきん）をかぶって、十二分に身じたくをしてから出かけたらいいだろうとみんなが寄って勧めたけれども、君は素朴（そぼく）なはばかりから帽子もかぶらずに、重々しい口調で別れの挨拶（あいさつ）をすますと、ガラス戸を引きあけて戸外に出た。

　私はガラス窓をこずいて外面に降り積んだ雪を落としながら、吹きたまったまっ白な雪の中をこいで行く君を見送った。君の黒い姿は——やはり頭巾をかぶらないままで、頭をむき出しにして雪になぶらせた——君の黒い姿は、白い地面に腰まで埋まって、あるいは

濃く、あるいは薄く、縞（しま）になって横降りに降りしきる雪の中を、ただ一人だんだん遠ざかって、とうとうかすんで見えなくなってしまった。

そして君に取り残された事務所は、君の来る前のような単調なさびしさと降りつむ雪とに閉じこめられてしまった。

私がそこを発（た）って東京に帰ったのは、それから三四日後の事だった。

四

今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿(つばき)が咲くようになった。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り広げて吸い込んでいる。君の住む岩内の港の水は、まだ流れこむ雪解(ゆきげ)の水に薄濁るほどにもなってはいまい。鋼鉄を水で溶かしたような海面が、ややもすると角立(かどだ)った波をあげて、岸を目がけて終日攻めよせているだろう。それにしてももう老いさらぼえた雪道を器用に拾いながら、金魚売りが天秤棒(てんびんぼう)をになって、無理にも春をよび覚(さ)ますような売り声を立てる季節にはなったろう。浜には津軽(つがる)や秋田(あきた)へんから集まって来た旅雁(りょがん)のような漁夫たちが、鰊(にしん)の建網(たてあみ)の修繕をしたり、

大釜（おおがま）の据（す）え付（つ）けをしたりして、黒ずんだ自然の中に、毛布の甲がけや外套（がいとう）のけばけばしい赤色をまき散らす季節にはなったろう。このころ私はまた妙に君を思い出す。君の張り切った生活のありさまを頭に描く。君はまざまざと私の想像の視野に現われ出て来て、見るように君の生活とその周囲とを私に見せてくれる。芸術家にとっては夢と現（うつつ）との閾（しきい）はないと言っていい。彼は現実を見ながら眠っている事がある。夢を見ながら目を見開いている事がある。私が私の想像にまかせて、ここに君の姿を写し出してみる事を君は拒むだろうか。私の鈍い頭にも同感というものの力がどのくら

い働きうるかを私は自分でためしてみたいのだ。君の寛大はそれを許してくれる事と私はきめてかかろう。
君を思い出すにつけて、私の頭にすぐ浮かび出て来るのは、なんと言ってもさびしく物すさまじい北海道の冬の光景だ。

五

長い冬の夜はまだ明けない。雷電峠と反対の湾の一角から長く突き出た造りぞこねの防波堤は大蛇(だいじゃ)の亡骸(むくろ)のようなまっ黒い姿を遠く海の面に横たえて、夜目に

も白く見える波濤(はとう)の牙(きば)が、小休(おや)みもなくその胴腹に嚙(く)いかかっている。砂浜に繋(もや)われた百艘(そう)近い大和船は、舳(へさき)を沖のほうへ向けて、互いにしがみつきながら、長い帆柱を左右前後に振り立てている。そのそばに、さまざまの漁具と弁当のお櫃(ひつ)とを持って集まって来た漁夫たちは、言葉少なに物を言いかわしながら、防波堤の上に建てられた組合の天気予報の信号灯を見やっている。暗い闇(やみ)の中に、白と赤との二つの火が、夜鳥の目のようにぎらりと光っている。赤と白との二つの球は、危険警戒を標示する信号だ。船を出すには一番鳥(いちばんどり)が鳴きわたる時刻まで待ってからにしなければならぬ。

町のほうは寝しずまって灯(ひ)一つ見えない。それらのすべてをおおいくるめて凍った雲は幕のように空低くかかっている。音を立てないばかりに雲は山のほうから沖のほうへと絶え間なく走り続ける。汀(みぎわ)まで雪に埋まった海岸には、見渡せる限り、白波がざぶんざぶん砕けて、風が――空気そのものをかっさらってしまいそうな激しい寒い風が雪に閉ざされた山を吹き、漁夫を吹き、海を吹きまくって、まっしぐらに水と空との閉じ目をめがけて突きぬけて行く。

　漁夫たちの群れから少し離れて、一団になったお内儀(かみ)さんたちの背中から赤子の激しい泣き声が起こる。

しばらくしてそれがしずまると、風の生み出す音の高い不思議な沈黙がまた天と地とにみなぎり満ちる。

ややニ時間もたったと思うころ、あや目も知れない闇(やみ)の中から、硫黄(いおう)が丘の山頂(たけ)――右肩をそびやかして、左をなで肩にした――が雲の産んだ鬼子のように、空中に現われ出る。鈍い土がまだ振り向きもしないうちに、空はいち早くも暁の光を吸い初めたのだ。

模範船（港内に四五艘(そう)あるのだが、船も大きいし、それに老練な漁夫が乗り込んでいて、他の船にかけ引き進退の合図をする）の船頭が頭をあつめて相談をし始める。どことも知れず、あの昼にはけうとい羽色を

持った烏（からす）の声が勇ましく聞こえだす。漁夫たちの群れもお内儀（かみ）さんたちのかたまりも、石のような不動の沈黙から急に生き返って来る。

「出すべ」

　そのさざめきの間に、潮で鏽（さ）び切った老船頭の幅の広い塩辛声（しおからごえ）が高くこう響く。

　漁夫たちは力強い鈍さをもって、互いに今まで立ち尽くしていた所を歩み離れてめいめいの持ち場につく。お内儀さんたちは右に左に夫（おっと）や兄や情人やを介抱して駆け歩く。今まで陶酔したようにたわいもなく波に揺られていた船の艫（とも）には漁夫たちが膝頭（ひざがしら）まで水に

浸って、わめき始める。ののしり騒ぐ声がひとしきり聞こえたと思うと、船はよんどころなさそうに、右に左に揺らぎながら、船首を高くもたげて波頭を切り開き切り開き、狂いあばれる波打ちぎわから離れて行く。最後の高いののしりの声とともに、今までの鈍さに似ず、あらゆる漁夫は、猿（ましら）のように船の上に飛び乗っている。ややともすると、舳（へさき）を岸に向けようとする船の中からは、長い竿（さお）が水の中に幾本も突き込まれる。船はやむを得ずまた立ち直って沖を目ざす。

　この出船の時の人々の気組み働きは、だれにでも激烈なアレッグロで終わる音楽の一片を思い起こさすだ

ろう。がやがやと騒ぐ聴衆のような雲や波の擾乱（じょうらん）の中から、漁夫たちの鈍い Largo pianissimo とも言うべき運動が起こって、それが始めのうちは周囲の騒音の中に消されているけれども、だんだんとその運動は熱情的となり力づいて行って、霊を得たように、漁夫の乗り込んだ舟が波を切り波を切り、だんだんと早くなる一定のテンポを取って沖に乗り出して行くさまは、力強い楽手の手で思い存分大胆にかなでられる Allegro Molto を思い出させずにはおかぬだろう。すべてのものの緊張したそこには、いつでも音楽が生まれるものと見える。

船はもう一個の敏活な生き物だ。船べりからは百足虫（むかで）のように艪（ろ）の足を出し、艫（とも）からは鯨のように舵（かじ）の尾を出して、あの物悲しい北国特有な漁夫のかけ声に励まされながら、まっ暗に襲いかかる波のしぶきをしのぎ分けて、沖へ沖へと岸を遠ざかって行く。海岸にひとかたまりになって船を見送る女たちの群れはもう命のない黒い石ころのようにしか見えない。漁夫たちは艪をこぎながら、帆綱を整えながら、浸水（あか）をくみ出しながら、その黒い石ころと、模範船の艫から一字を引いて怪火（かいか）のように流れる炭火の火の子とをながめやる。長い鉄の火箸（ひばし）に火の起こった炭をはさんで高く

あげると、それが風を食って盛んに火の子を飛ばすのだ。すべての船は始終それを目あてにして進退をしなければならない。炭火が一つあげられた時には、天候の悪くなる印（しるし）と見て船を停（と）め、二つあげられた時には安全になった印として再び進まねばならぬのだ。

暁闇（ぎょうあん）を、物々しく立ち騒ぐ風と波との中に、海面低く火花を散らしながら青い炎を放って、燃え上がり燃えかすれるその光は、幾百人の漁夫たちの命を勝手に支配する運命の手だ。その光が運命の物すごさをもって海上に長く尾を引きながら消えて行く。

　どこからともなく海鳥の群れが、白く長い翼に羽音

を立てて風を切りながら、船の上に現われて来る。猫（ねこ）のような声で小さく呼びかわすこの海の砂漠（さばく）の漂浪者は、さっと落として来て波に腹をなでさすかと思うと、翼を返して高く舞い上がり、ややしばらく風に逆らってじっとこたえてから、思い直したように打ち連れて、小気味よく風に流されて行く。その白い羽根がある瞬間には明るく、ある瞬間には暗く見えだすと、長い北国の夜もようやく明け離れて行こうとするのだ。夜の闇（やみ）は暗く濃く沖のほうに追いつめられて、東の空には黎明（れいめい）の新しい光が雲を破り始める。物すさまじい朝焼けだ。あやまって海に落ち込んだ悪魔が、肉付きのい

い右の肩だけを波の上に現わしている、その肩のような雷電峠の絶巓（ぜってん）をなでたりたたいたりして叢立（むらだ）ち急ぐ嵐雲（あらしぐも）は、炉に投げ入れられた紫のような光に燃えて、山ふところの雪までも透明な藤色（ふじいろ）に染めてしまう。それにしても明け方のこの暖かい光の色に比べて、なんという寒い空の風だ。長い夜のために冷え切った地球は、今そのいちばん冷たい呼吸を呼吸しているのだ。

　私は君を忘れてはならない。もう港を出離れて木の葉のように小さくなった船の中で、君は配縄（はいなわ）の用意をしながら、恐ろしいまでに荘厳（そうごん）なこの日の序幕をながめているのだ。君の父上は舵座（かじざ）にあぐらをかいて、

時々晴雨計を見やりながら、変化のはげしいそのころの天気模様を考えている。海の中から生まれて来たような老漁夫の、皺（しわ）にたたまれた鋭い眼は、雲一片の徴（しるし）をさえ見落とすまいと注意しながら、顔には木彫のような深い落ち付きを見せている。君の兄上は、凍って自由にならない手のひらを腰のあたりの荒布にこすりつけて熱を呼び起こしながら、帆綱を握って、風の向きと早さに応じて帆を立て直している。雇われた二人の漁夫は二人の漁夫で、二尋（ふたひろ）置きに本縄（ほんなわ）から下がった針に餌（え）をつけるのに忙（せわ）しい。海の上を見渡すと、港を出てからてんでんばらばらに散らばって、朝の光に白

い帆をかがやかした船という船は、等しく沖を目がけて波を切り開いて走りながら、君の船と同様な仕事にいそしんでいるのだ。

夜が明け離れると海風と陸風との変わり目が来て、さすがに荒れがちな北国の冬の海の上もしばらくは穏やかになる。やがて瀬は達せられる。君らは水の色を一目見たばかりで、海中に突き入った陸地と海そのものの界（さかい）とも言うべき瀬がどう走っているかをすぐ見て取る事ができる。

帆がおろされる。勢いで走りつづける船足は、舵（かじ）のために右なり左なりに向け直される。同時に浮標（うき）の付

いた配縄（はいなわ）の一端が氷のような波の中にざぶんざぶんと投げこまれる。二十五町から三十町に余る長さをもった縄全体が、海上に長々と横たえられるまでには、朝早くから始めても、日が子午線近く来るまでかからねばならないのだ。君らの船は艪（ろ）にあやつられて、横波を食いながらしぶしぶ進んで行く。ざぶり……ざぶり……寒気のために比重の高くなった海の水は、凍りかかった油のような重さで、物すごいインド藍（あい）の底のほうに、雲間を漏れる日光で鈍く光る配縄の餌（え）をのみ込んで行く。

今まで花のような模様を描いて、海面のところどこ

ろに日光を恵んでいた空が、急にさっと薄曇ると、どこからともなく時雨(しぐれ)のような霰(あられ)が降って来て海面を泡立(あわだ)たす。船と船とは、見る見る薄い糊(のり)のような青白い膜(まく)に隔てられる。君の周囲には小さな白い粒がかわき切った音を立てて、あわただしく船板を打つ。君は小ざかしい邪魔者から毛糸の襟巻(えりまき)で包んだ顔をそむけながら、配縄を丹念におろし続ける。

すっと空が明るくなる。霰(あられ)はどこかへ行ってしまった。そしてまっさおな海面に、漁船は陰になりひなたになり、堅い輪郭を描いて、波にもまれながらさびしく漂っている。

きげん買いな天気は、一日のうちに幾度となくこうした顔のしかめ方をする。そして日が西に回るに従ってこのふきげんは募って行くばかりだ。

　寒暑をかまっていられない漁夫たちも吹きざらしの寒さにはひるまずにはいられない。配縄（はいなわ）を投げ終わると、身ぶるいしながら五人の男は、舵座（かじざ）におこされた焜炉（こんろ）の火のまわりに慕い寄って、大きなお櫃（ひつ）から握り飯をわしづかみにつかみ出して食いむさぼる。港を出る時には一かたまりになっていた友船も、今は木の葉のように小さく互い互いからかけ隔たって、心細い弱々しそうな姿を、涯（はて）もなく露領に続く海原（うなばら）のここか

しこに漂わせている。三里の余も離れた陸地は高い山々の半腹から上だけを水の上に見せて、降り積んだ雪が、日を受けた所は銀のように、雲の陰になった所は鉛のように、妙に険しい輪郭を描いている。

漁夫たちは口を食物で頬張らせながら、きのうの漁のありさまや、きょうの予想やらをいかにも地味な口調で語り合っている。そういう時に君だけは自分が彼らの間に不思議な異邦人である事に気づく。同じ艪をあやつり、同じ帆綱をあつかいながら、なんという悲しい心の距りだろう。押しつぶしてしまおうと幾度試みても、すぐあとからまくしかかって来る芸術

に対する執着をどうすることもできなかった。

とはいえ、飛行機の将校にすらなろうという人の少ない世の中に、生きては人の冒険心をそそっていかにも雄々しい頼みがいある男と見え、死んでは万人にその英雄的な最後を惜しみ仰がれ、遺族まで生活の保障を与えられる飛行将校にすらなろうという人の少ない世の中に、荒れても晴れても毎日毎日、一命を投げてかかって、緊張し切った終日の労働に、玉の緒で炊き上げたような飯を食って一生を過ごして行かねばならぬ漁夫の生活、それにはいささかも遊戯的な余裕がないだけに、命とかけがえの真実な仕事であるだけに、

言葉には現わし得ないほど尊さと厳粛さとを持っている。ましてや彼らがこの目ざましいけなげな生活を、やむを得ぬ、苦しい、しかし当然な正しい生活として、誇りもなく、矯飾（きょうしょく）もなく、不平もなく、素直に受け取り、軛（くびき）にかかった輓牛（ひきうし）のような柔順な忍耐と覚悟とをもって、勇ましく迎え入れている、その姿を見ると、君は人間の運命のはかなさと美しさとに同時に胸をしめ上げられる。

こんな事を思うにつけて、君の心の目にはまざまざと難破船の痛ましい光景が浮かび出る。君はやはり舵座（かじざ）にすわって他の漁夫と同様に握り飯を食ってはい

るが、いつのまにか人々の会話からは遠のいて、物思わしげに黙りこくってしまう。そして果てしもなく回想の迷路をたどって歩く。

六

それはある年の三月に、君が遭遇した苦い経験の一つだ。模範船からすぐ引き上げろという信号がかかったので、今までも気づかいながら仕事を続けていた漁船は、打ち込み打ち込む波濤と戦いながら配縄をたくし上げにかかったけれども、吹き始めた暴風は一秒ご

とに募るばかりで、船頭はやむなく配縄を切って捨てさせなければならなくなった。

「またはあ銭(ぜに)こ海さ捨てるだ」

と君の父上は心から嘆息してつぶやきながら君に命じて配縄(はいなわ)を切ってしまった。

海の上はただ狂い暴(あ)れる風と雪と波ばかりだ。縦横に吹きまく風が、思いのままに海をひっぱたくので、つるし上げられるように高まった三角波が互いに競って取っ組み合うと、取っ組み合ったただけの波はたちまちまっ白な泡(あわ)の山に変じて、その巓(いただき)が風にちぎられながら、すさまじい勢いで目あてもなく倒れかかる。

目も向けられないような濃い雪の群れは、波を追ったり波からのがれたり、さながら風の怒りをいどむ小悪魔のように、面憎(つらにく)く舞いながら右往左往に飛びはねる。吹き落として来た雪のちぎれは、大きな霧のかたまりになって、海とすれすれに波の上を矢よりも早く飛び過ぎて行く。

雪と浸水(あか)とで糊(のり)よりもすべる船板の上を君ははうようにして舳(へさき)のほうへにじり寄り、左の手に友綱の鉄環(かなわ)をしっかりと握って腰を据(す)えながら、右手に磁石をかまえて、大声で船の進路を後ろに伝える。二人の漁夫は大竿(おおざお)を風上になった舷(ふなべり)から二本突き出して、

動かないように結びつける。船の顚覆（てんぷく）を少しなりとも防ごうためだ。君の兄上は帆綱を握って、舵座（かじざ）にいる父上の合図どおりに帆の上げ下げを誤るまいと一心になっている。そしてその間にもしっきりなしに打ち込む浸水（あか）を急がしく汲（く）んでは舷から捨てている。命がけに呼びかわす互い互いの声は妙に上（うわ）ずって、風に半分がた消されながら、それでも五人の耳には物すごくも心強くも響いて来る。

「おも舵っ」

「右にかわすだってえば」

「右だ……右だぞっ」

「帆綱をしめろやっ」

「友船は見えねえかよう、いたらくっつけ」やーい

どう吹こうとためらっていたような疾風がやがてしっかり方向を定めると、これまでただあてもなく立ち騒いでいたらしく見える三角波は、だんだんと丘陵のような紆濤（うねり）に変わって行った。言葉どおりに水平に吹雪（ふぶ）く雪の中を、後ろのほうから、見上げるような大きな水の堆積（たいせき）が、想像も及ばない早さでひた押しに押して来る。

「来たぞーっ」

緊張し切った五人の心はまたさらに恐ろしい緊張を

加えた。まぶしいほど早かった船足が急によどんで、後ろに吸い寄せられて、艫（とも）が薄気味悪く持ち上がって、船中に置かれた品物ががらがらと音をたてて前にのめり、人々も何かに取りついて腰のすわりを定めなおさなければならなくなった瞬間に、船はひとあおりあおって、物すごい不動から、奈落（ならく）の底までもとすさまじい勢いで波の背をすべり下った。同時に耳に余る大きな音を立てて、紆濤（うねり）は屏風倒（びょうぶだお）しに倒れかえる。わきかえるような泡（あわ）の混乱の中に船をもまれながら行く手を見ると、いったんこわれた波はすぐまた物すごい丘陵に立ちかえって、目の前の空を高くしきりながら、

見る見る悪夢のように遠ざかって行く。

ほっと安堵（あんど）の息をつく隙（すき）も与えず、後ろを見ればまた紆濤（うねり）だ。水の山だ。その時、

「あぶねえ」

「ぽきりっ」

というけたたましい声を同時に君は聞いた。そして同時に野獣の敏感さをもって身構えしながら後ろを振り向いた。根もとから折れて横倒しに倒れかかる帆柱と、急に命を失ったようにしわになってたたまる帆布と、その陰から、飛び出しそうに目をむいて、大きく口をあけた君の兄上の顔とが映った。

君は咄嗟（とっさ）に身をかわして、頭から打ってかかろうとする帆柱から身をかばった。人々は騒ぎ立って艪（ろ）を構えようとひしめいた。けれども無二無三な船足の動揺には打ち勝てなかった。帆の自由である限りは金輪際（こんりんざい）船を顛覆（てんぷく）させないだけの自信を持った人たちも、帆を奪い取られては途方に暮れないではいられなかった。船足のとまった船ではもう舵（かじ）もきかない。船は波の動揺のままにまに勝手放題に荒れ狂った。

第一の紆濤（うねり）、第二の紆濤、第三の紆濤には天運が船を顛覆からかばってくれた。しかし特別に大きな第四の紆濤を見た時、船中の人々は観念しなければならな

かった。

　雪のために薄くぼかされたまっ黒な大きな山、その頂からは、火が燃え立つように、ちらりちらり白い波頭（なみがしら）が立っては消え、消えては立ちして、瞬間ごとに高さを増して行った。吹き荒れる風すらがそのためにさえぎりとめられて、船の周囲には気味の悪い静かさが満ち広がった。それを見るにつけても波の反対の側をひた押しに押す風の激しさ強さが思いやられた。艫（とも）を波のほうへ向ける事も得しないで、力なく漂う船の前まで来ると、波の山は、いきなり、獲物に襲いかかる猛獣のように思いきり背延びをした。と思うと、波

頭は吹きつける風にそりを打って艟（どう）とくずれこんだ。

はっと思ったその時おそく、君らはもうまっ白な泡（あわ）に五体を引きちぎられるほどもまれながら、船底を上にして顚覆（てんぷく）した船体にしがみつこうともがいていた。見ると君の目の届く所には、君の兄上が頭からずぶぬれになって、ぬるぬると手がかりのない舷（ふなべり）に手をあてがってはすべり、手をあてがってはすべりしていた。君は大声を揚げて何か言った。兄上も大声を揚げて何か言ってるらしかった。しかしお互いに大きな口をあくのが見えるだけで、声は少しも聞こえて来ない。

割合に小さな波があとからあとからあとから押し寄せて来て、

船を揺り上げたり押しおろしたりした。そのたびごとに君たちは船との縁を絶たれて、水の中に漂わねばならなかった。そして君は、着込んだ厚衣(あつし)の芯(しん)まで水が透って鉄のように重いのにもかかわらず、一心不乱に動かす手足と同じほどの忙(せわ)しさで、目と鼻ぐらいの近さに押し迫った死からのがれ出る道を考えた。心の上澄(うわず)みは妙におどおどとあわてている割合に、心の底は不思議に気味悪く落ちついていた。それは君自身にすら物すごいほどだった。空といい、海といい、船といい、君の思案といい、一つとして目あてなく動揺しないものはない中に、君の心の底だけが悪落ち付きに

落ち付いて、「死にはしないぞ」とちゃんときめ込んでいるのがかえって薄気味悪かった。それは「死ぬのがいやだ」「生きていたい」「生きる余席の有る限りはどうあっても生きなければならぬ」「死にはしないぞ」という本能の論理的結論であったのだ。この恐ろしい盲目な生の事実が、そしてその結論だけが、目を見すえたように、君の心の底に落ち付き払っていたのだった。
　君はこの物すごい無気味な衝動に駆り立てられながら、水船なりにも顛覆した船を裏返す努力に力を尽くした。残る四人の心も君と変わりはないと見えて、険しい困苦と戦いながら、四人とも君のいる舷（ふなべり）のほう

へ集まって来た。そして申し合わしたように、いっしょに力を合わせて、船の胴腹にはい上がるようにしたので、船は一方にかしぎ始めた。

「それ今ひと息だぞっ」

　君の父上がしぼり切った生命を声にしたように叫んだ。一同はまた懸命な力をこめた。

　おりよく——全くおりよく、天運だ——その時船の横面（よこつら）に大きな波が浴びせこんで来たので、片方だけに人の重りの加わった船はくるりと裏返った。舷までひたひたと水に埋もれながらもとにかく船は真向きになって水の面に浮かび出た。船が裏返る拍子に五人は

五人ながら、すっぽりと氷のような海の中にもぐり込みながら、急に勢いづいて船の上に飛び上がろうとした。しかししこたま着込んだ衣服は思うざまぬれ透っていて、ややともすれば人々を波の中に吸い込もうとした。それが一方の舷に取りついて力をこめればまた顚覆するにきまっている。生死の瀬戸ぎわにはまり込んでいる人々の本能は恐ろしいほど敏捷な働きをする。五人の中の二人は咄嗟に反対の舷に回った。そして互いに顔を見合わせながら、一度にやっと声をかけ合わせて半身を舷に乗り上げた。足のほうを船底に吸い寄せられながらも、半身を水から救い出した人々の

顔に現われたなんとも言えない緊張した表情――それを君は忘れる事ができない。次の瞬間にはわっと声をあげて男泣きに泣くか、それとも我れを忘れて狂うように笑うか、どちらかをしそうな表情――それを君は忘れる事ができない。

　すべてこうした懸命な努力は、降りしきる雪と、荒れ狂う水と、海面をこすって飛ぶ雲とで表わされる自然の憤怒（ふんぬ）の中で行なわれたのだ。怒った自然の前には、人間は塵（ちり）ひとひらにも及ばない。人間などという存在は全く無視されている。それにも係わらず君たちは頑固（がんこ）に自分たちの存在を主張した。雪も風も波も君た

ちを考えにいれてはいないのに、君たちはしいてもそれらに君たちを考えさせようとした。

舷(ふなべり)を乗り越して奔馬のような波頭がつぎつぎにすり抜けて行く。それに腰まで浸しながら、君たちは船の中に取り残された得物をなんでもかまわず取り上げて、それを働かしながら、死からのがるべき一路を切り開こうとした。ある者は艪(ろ)を拾いあてた。あるものは船板を、あるものは水柄杓(みずびしゃく)を、あるものは長いたわいしの柄を、何ものにも換えがたい武器のようにしっかり握っていた。そして舷から身を乗り出して、子供がするように、水を漕(こ)いだり、浸水(あか)をかき出したりした。

吹き落ちる気配（けはい）も見えないあらしは、果てもなく海上を吹きまくる。目に見える限りはただ波頭ばかりだ。犬のような敏捷（すばや）さで方角を嗅（か）ぎ慣れている漁夫たちも、今は東西の定めようがない。東西南北は一つの鉢（はち）の中ですりまぜたように渾沌（こんとん）としてしまった。

薄い暗黒。天からともなく地からともなくわき起こる大叫喚。ほかにはなんにもない。

「死にはしないぞ」——そんなはめになってからも、君の心の底は妙に落ち着いて、薄気味悪くこの一事を思いつづけた。

君のそばには一人の若い漁夫がいたが、その右の

顳顬（こめかみ）のへんから生々しい色の血が幾条にもなって流れていた。それだけがはっきり君の目に映った。「死にはしないぞ」――それを見るにつけても、君はまたしみじみとそう思った。

　こういう必死な努力が何分続いたのか、何時間続いたのか、時間というもののすっかり無くなってしまったこの世界では少しもわからない。しかしながらとにかく君が何ものも納（い）れ得ない心の中に、疲労という感じを覚えだして、これは困った事になったと思ったころだった、突然一人の漁夫が意味のわからない言葉を大きな声で叫んだのは。今までも五人が五人ながら

始終何か互いに叫び続けていたのだったが、この叫び声は不思議にきわ立ってみんなの耳に響いた。

残る四人は思わず言い合わせたようにその漁夫のほうを向いて、その漁夫が目をつけているほうへ視線をたどって行った。

船！……船！

濃い吹雪（ふぶき）の幕のあなたに、さだかには見えないが、波の背（そびら）に乗って四十五度くらいの角度に船首を下に向けながら、帆をいっぱいに開いて、矢よりも早く走って行く一艘（そう）の船！

それを見ると何かが君の胸をどきんと下からつき上

げて来た。君は思わずすすり泣きでもしたいような心持ちになった。何はさておいても君たちはその船を目がけて助けを求めながら近寄って行かねばならぬはずだった。余の人たちも君と同様、確かに何物かを目の前に認めたらしく、奇怪な叫び声を立てた漁夫が、目を大きく開いて見つめているあたりを等しく見つめていた。そのくせ一人として自分らの船をそっちのほうへ向けようとしているらしい者はなかった。それをいぶかる君自身すら、心がただわくわくと感傷的になりまさるばかりで、急いで働かすべき手はかえって萎(な)えてしまっていた。

白い帆をいっぱいに開いたその船は、依然として船首を下に向けたまま、矢のように走って行く。降りしきる吹雪（ふぶき）を隔てた事だから、乗り組みの人の数もはっきりとは見えないし、水の上に割合に高く現われている船の胴も、木の色というよりは白堊（はくあ）のような生白さに見えていた。そして不思議な事には、波の腹に乗っても波の背に乗っても、舳（へさき）は依然として下に向いたままである。風の強弱に応じて帆を上げ下げする様子もない。いつまでも目の前に見えながら、四十五度くらいに船首を下向きにしたまま、矢よりも早く走って行く。

ぎょっとして気がつくと、その船はいつのまにか水から離れていた。波頭から三段も上と思われるあたりを船は傾(かし)いだまま矢よりも早く走っている。君の頭はかあんとしてすくみ上がってしまった。同時に船はだんだん大きくぼやけて行った。いつのまにかその胴体は消えてなくなって、ただまっ白い帆だけが矢よりも早く動いて行くのが見やられるばかりだ。と思うまもなくその白い大きな帆さえが、降りしきる雪の中に薄れて行って、やがてはかき消すように見えなくなってしまった。

怒濤(どとう)。白沫(しらあわ)。さっさっと降りしきる雪。目をかすめ

て飛びかわす雲の霧。自然の大叫喚……そのまっただ中にたよりなくもみさいなまれる君たちの小さな水船……やっぱりそれだけだった。

　生死の間にさまよって、疲れながらも緊張し切った神経に起こる幻覚（ハルシネーション）だったのだと気がつくと、君は急に一種の薄気味悪さを感じて、力を一度にもぎ取られるように思った。

　さきほど奇怪な叫び声を立てたその若い漁夫は、やがて眠るようにおとなしく気を失って、ひょろひょろとよろめくと見る間に、くずれるように胴の間にぶっ倒れてしまった。

漁夫たちは何か魔でもさしたように思わず極度の不安を目に現わして互いに顔を見合わせた。

「死にはしないぞ」

不思議な事にはそのぶっ倒れた男を見るにつけて、また漁夫たちの不安げな様子を見るにつけて、君は懲りずまに薄気味悪くそう思いつづけた。

君たちがほんとうに一艘（そう）の友船と出くわしたまでには、どれほどの時間がたっていたろう。しかしとにかく運命は君たちには無関心ではなかったと見える。急に十倍も力を回復したように見えた漁夫たちが、必死になって君たちの船とその船とをつなぎ合わせ、半分

がた凍ってしまった帆を形ばかりに張り上げて、風の追うままに船を走らせた時には、なんとも言えない幸福な感謝の心が、おさえてもおさえてもむらむらと胸の先にこみ上げて来た。

着く所に着いてから思い存分の手当をするからしばらく我慢してくれと心の中にわびるように言いながら、君は若い漁夫を卒倒したまま胴の間の片すみに抱きよせて、すぐ自分の仕事にかかった。

やがて行く手の波の上にぼんやりと雷電峠の突角が現われ出した。山脚（やまあし）は海の中に、山頂は雲の中に、山腹は雪の中にもみにもまれながら、決して動かないも

のが始めて君たちの前に現われたのだ。それを見つけた時の漁夫たちの心の勇み……魚が水にあったような、野獣が山に放たれたような、太陽が西を見つけ出したようなその喜び……船の中の人たちは思わず足爪立（つまだ）てんばかりに総立ちになった。人々の心までが総立ちになった。

「峠が見えたぞ……北に取れや舵（かじ）を……隠れ岩さ乗り上げんな……雪崩（なだれ）にも打たせんなよう……」

そう言う声がてんでんに人々の口からわめかれた。

それにしても船はひどく流されていたものだ。雷電峠から五里も離れた瀬にいたものが、いつのまにかこん

な所に来ているのだ。見る見る風と波とに押しやられて船は吸い付けられるように、吹雪(ふぶき)の間からまっ黒に天までそそり立つ断崖(だんがい)に近寄って行くのを、漁夫たちはそうはさせまいと、帆をたて直し、艪(ろ)を押して、横波を食わせながら船を北へと向けて行った。

陸地に近づくと波はなお怒る。鬣(たてがみ)を風になびかして暴(あ)れる野馬のように、波頭は波の穂になり、波の穂は飛沫(ひまつ)になり、飛沫はしぶきになり、しぶきは霧になり、霧はまたまっ白い波になって、息もつかせずあとからあとからと山すそに襲いかかって行く。山すその岩壁に打ちつけた波は、煮えくりかえった熱湯をぶち

つけたように、湯げのような白沫（しらあわ）を五丈も六丈も高く飛ばして、反（そ）りを打ちながら海の中にどっ、とくずれ込む。

その猛烈な力を感じてか、断崖（だんがい）の出鼻に降り積もって、徐々に斜面をすべり下って来ていた積雪が、地面との縁（えん）から離れて、すさまじい地響きとともに、何百丈の高さから一気になだれ落ちる。巓（いただき）を離れた時には一握りの銀末に過ぎない。それが見る見る大きさを増して、隕星（いんせい）のように白い尾を長く引きながら、音も立てずにまっしぐらに落として来る。あなやと思う間にそれは何十里にもわたる水晶の大簾（おおすだれ）だ。ど、ど、ど

どどしーん……さあーっ……。広い海面が目の前でまっ白な平野になる。山のような五百重（いおえ）の大波はたちまちおい退けられて漣（さざなみ）一つ立たない。どっとそこを目がけて狂風が四方から吹き起こる……その物すさまじさ。

　君たちの船は悪鬼におい迫られたようにおびえながら、懸命に東北へと舵（かじ）を取る。磁石のような陸地の吸引力からようよう自由になる事のできた船は、また揺れ動く波の山と戦わねばならぬ。

　それでも岩内の港が波の間に隠れたり見えたりし始めると、漁夫たちの力は急に五倍にも十倍にもなった。

今までの人数の二倍も乗っているように船は動いた。岸から打ち上げる目標の烽火(のろし)が紫だって暗黒な空の中でぱっとはじけると、鬖々(さんさん)として火花を散らしながら闇(やみ)の中に消えて行く。それを目がけて漁夫たちは有る限りの艪(ろ)を黙ったままでひた漕(こ)ぎに漕いだ。その不思議な沈黙が、互いに呼びかわす惨(むご)らしい叫び声よりもかえって力強く人々の胸に響いた。

船が波の上に乗った時には、波打ちぎわに集まって何か騒ぎ立てている群衆が見やられるまでになった。やがてあらしの間にも大砲のような音が船まで聞こえて来た。と思うと救助縄(きゅうじょなわ)が空をかける蛇(へび)のように曲

がりくねりながら、船から二三段隔たった水の中にざぶりと落ちた。漁夫たちはそのほうへ船を向けようとひしめいた。第二の爆声が聞こえた。縄はあやまたず船に届いた。

　二三人の漁夫がよろけころびながらその縄のほうへ駆け寄った。

　音は聞こえずに烽火（のろし）の火花は間を置いて怪火のようにはるかの空にぱっと咲いてはすぐ散って行く。

　船は縄に引かれてぐんぐん陸のほうへ近寄って行く。水底が浅くなったために無二無三に乱れ立ち騒ぐ波濤（はとう）の中を、互いにしっかりしがみ合った二艘（そう）の船は、半

分がた水の中をくぐりながら、半死のありさまで進んで行った。

君は始めて気がついたように年老いた君の父上のほうを振り返って見た。父上はひざから下を水に浸して舵座（かじざ）にすわったまま、じっと君を見つめていた。今まで絶えず君と君の兄上とを見つめていたのだ。そう思うと君はなんとも言えない骨肉の愛着にきびしく捕えられてしまった。君の目には不覚にも熱い涙が浮かんで来た。君の父上はそれを見た。

「あなたが助かってよござんした」

「お前が助かってよかった」

両人の目には咄嗟（とっさ）の間にも互いに親しみをこめてこう言い合った。そしてこのうれしい言葉を語る目から互い互いの目は離れようとしなかった。そうしたままでしばらく過ぎた。

君は満足しきってまた働き始めた。もう目の前には岩内の町が、きたなく貧しいながらに、君にとってはなつかしい岩内の町が、新しく生まれ出たままのように立ち列（つら）なっていた。水難救済会の制服を着た人たちが、右往左往に駆け回るありさまもまざまざと目に映った。

なんとも言えない勇ましい新しい力――上げ潮のよ

うに、腹のどん底からむらむらとわき出して来る新しい力を感じて、君は「さぁ来い」と言わんばかりに、艪(ろ)をひしげるほど押しつかんだ。そして矢声をかけながら漕(こ)ぎ始めた。涙があとからあとからあとから君の頬(ほお)を伝って流れた。

　唖(おし)のように今まで黙っていたほかの漁夫たちの口からも、やにわに勇ましいかけ声があふれ出て、君の声に応じた。艪は梭(ひ)のように波を切り破って激しく働いた。

　岸の人たちが呼びおこす声が君たちの耳にもはいるまでになった。と思うと君はだんだん夢の中に引き込

まれるようなぼんやりした感じに襲われて来た。

君はもう一度君の父上のほうを見た。父上は舵座にすわっている。しかしその姿は前のように君になんらの迫った感じをひき起こさせなかった。

やがて船底にじゃりじゃりと砂の触れる音が伝わった。船は滞りなく君が生まれ君が育てられたその土の上に引き上げられた。

「死にはしなかったぞ」

と君は思った。同時に君の目の前は見る見るまっ暗になった。……君はそのあとを知らない。

七

君は漁夫たちとひざをならべて、同じ握り飯を口に運びながら、心だけはまるで異邦人のように隔たってこんなことを思い出す。なんという真剣なそして険しい漁夫の生活だろう。人間というものは、生きるためには、いやでも死のそば近くまで行かなければならないのだ。いわば捨て身になって、こっちから死に近づいて、死の油断を見すまして、かっぱらいのように生の一片をひったくって逃げて来なければならないのだ。死は知らんふりをしてそれを見やっている。人間は奪

い取って来た生をたしなみながらしゃぶるけれども、ほどなくその生はまた尽きて行く。そうするとまた死の目の色を見すまして、死のほうにぬすみ足で近寄って行く。ある者は死があまり無頓着そうに見えるので、ついつい気を許して少し大胆に高慢にふるまおうとする。と鬼一口だ。もうその人は地の上にはいない。ある者は年とともにいくじがなくなって行って、死の姿がいよいよ恐ろしく目に映り始める。そしてそれに近寄る冒険を躊躇する。そうすると死はやおら物憂げな腰を上げて、そろそろとその人に近寄って来る。ガラガラ蛇に見こまれた小鳥のように、その人は逃げも得し

ないですくんでしまう。次の瞬間にその人はもう地の上にはいない。人の生きて行く姿はそんなふうにも思いなされる。実にはかないともなんとも言いようがない。その中にも漁夫の生活の激しさは格別だ。彼らは死に対してけんかをしかけんばかりの切羽（せっぱ）つまった心持ちで出かけて行く。陸の上ではなんと言っても偽善も弥縫（びほう）もある程度までは通用する。ある意味では必要であるとさえも考えられる。海の上ではそんな事は薬の足（た）しにしたくもない。真裸な実力と天運ばかりがすべての漁夫の頼みどころだ。その生活はほんとに悲壮だ。彼らがそれを意識せず、生きるという事はすべて

こうしたものだとあきらめをつけて、疑いもせず、不平も言わず、自分のために、自分の養わなければならない親や妻や子のために、毎日毎日板子一枚の下は地獄のような境界に身を放(な)げ出して、せっせと骨身を惜しまず働く姿はほんとうに悲壮だ。そして惨(みじ)めだ。なんだって人間というものはこんなしがない苦労をして生きて行かなければならないのだろう。

世の中には、ことに君が少年時代を過ごした都会という所には、毎日毎日安逸な生を食傷するほどむさぼって一生夢のように送っている人もある。都会とは言うまい。だんだんとさびれて行くこの岩内の小さな

町にも、二三百万円の富を祖先から受け嗣（つ）いで、小樽（おたる）には立派な別宅を構えてそこに妾（めかけ）を住まわせ、自分は東京のある高等な学校をともかくも卒業して、話でもさせればそんなに愚鈍にも見えないくせに、一年じゅうこれと言ってする仕事もなく、退屈をまぎらすための行楽に身を任せて、それでも使い切れない精力の余剰を、富者の贅沢（ぜいたく）の一つである癇癪（かんしゃく）に漏らしているのがある。君はその男をよく知っている。小学校時代には教室まで一つだったのだ。それが十年かそこらの年月の間に、二人の生活は恐ろしくかけ隔たってしまったのだ。君はそんな人たちを一度でもうらやま

しいと思った事はない。その人たちの生活の内容のむなしさを想像する充分の力を君は持っている。そして彼らが彼らの導くような生活をするのは道理があると合点がゆく。金があって才能が平凡だったら勢いああしてわずかに生の倦怠（けんたい）からのがれるほかはあるまいとひそかに同情さえされぬではない。その人たちが生に飽満して暮らすのはそれでいい。しかし君の周囲にいる人たちがなぜあんな恐ろしい生死の境の中に生きる事を僥倖（ぎょうこう）しなければならない運命にあるのだろう。なぜ彼らはそんな境遇——死ぬ瞬間まで一分の隙（すき）を見せずに身構えていなければならないような境遇にいな

がら、なぜ生きようとしなければならないのだろう。これは君に不思議ななぞのようなここちを起こさせる。ほんとうに生は死よりも不思議だ。

その人たちは他人眼（よそめ）にはどうしても不幸な人たちと言わなければならない。しかし君自身の不幸に比べてみると、はるかに幸福だと君は思い入るのだ。彼らにはとにかくそういう生活をする事がそのまま生きる事なのだ。彼らはきれいさっぱりとあきらめをつけて、そういう生活の中に頭からはまり込んでいる。少しも疑ってはいない。それなのに君は絶えずいらいらして、目前の生活を疑い、それに安住する事ができないでい

る。君は喜んで君の両親のために、君の家の苦しい生活のために、君のがんじょうな力強い肉体と精力とを提供している。君の父上のかりそめの風邪(かぜ)がなおって、しばらくぶりでいっしょに漁(りょう)に出て、夕方になって家に帰って来てから、一家がむつまじくちゃぶ台のまわりを囲んで、暗い五燭(しょく)の電燈の下で箸(はし)を取り上げる時、父上が珍しく木彫のような固い顔に微笑をたたえて、

「今夜ははあおまんまがうめえぞ」

と言って、飯茶わんをちょっと押しいただくように目八分に持ち上げるのを見る時なぞは、君はなんと言っ

ても心から幸福を感ぜずにはいられない。君は目前の生活を決して悔やんでいるわけではないのだ。それにも係わらず、君は何かにつけてすぐ暗い心になってしまう。

「絵がかきたい」

君は寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかきいだいているのだ。その望みをふり捨ててしまえる事なら世の中は簡単なのだ。

恋――互いに思い合った恋と言ってもこれほどの執着はあり得まいと君自身の心を憐（あわ）れみ悲しみながらつくづくと思う事がある。君の厚い胸の奥からは深いた

め息が漏れる。

雨の日などに土間にすわりこんで、兄上や妹さんなぞといっしょに、配縄（はいなわ）の繕いをしたりしていると、どうかした拍子にみんなが仕事に夢中になって、むつまじくかわしていた世間話すら途絶えさして、黙りこんで手先ばかりを忙（せわ）しく働かすような時がある。こういう瞬間に、君は我れにもなく手を休めて、茫然（ぼうぜん）と夢でも見るように、君の見ておいた山の景色を思い出している事がある。この山とあの山との距（へだた）りの感じは、界（さかい）の線をこういう曲線で力強くかきさえすれば、きっといいに違いない、そんな事を一心に思い込んでしま

う。そして鋏(はさみ)を持った手の先で、ひとりでに、想像した曲線をひざの上に幾度もかいては消し、かいては消ししている。

　またある時は沖に出て配縄をたぐり上げるだいじな忙(せわ)しい時に、君は板子の上にすわって、二本ならべて立てられたビールびんの間から縄をたぐり込んで、釣(つ)りあげられた明鯛(すけそう)がびんにせかれるために、針の縁(えん)を離れて胴の間にぴちぴちはねながら落ちて行くのをじっと見やっている。そしてクリムソンレーキを水に薄く溶かしたよりもっと鮮明な光を持った鱗(うろこ)の色に吸いつけられて、思わずぼんやりと手の働きをやめて

しまう。

　これらの場合はっと我れに返った瞬間ほど君を惨(みじ)めにするものはない。居眠りしたのを見つけられでもしたように、君はきょとんと恥ずかしそうにあたりを見回して見る。ある時は兄上や妹さんが、暗まって行く夕方の光に、なお気ぜわしく目を縄(なわ)によせて、せっせとほつれを解いたり、切れ目をつないだりしている。ある時は漁夫たちが、寒さに手を海老(えび)のように赤くへし曲げながら、息せき切って配縄(はいなわ)をたくし上げている。君は子供のように思わず耳もとまで赤面する。

「なんというだらしのない二重生活だ。おれはいった

いおれに与えられた運命の生活に男らしく服従する覚悟でいるんじゃないか。それだのにまだちっぽけな才能に未練を残して、柄にもない野心を捨てかねていると見える。おれはどっちの生活にも真剣にはなれないのだ。おれの絵に対する熱心だけから言うと、絵かきになるためには充分すぎるほどなのだが、それだけの才能があるかどうかという事になると判断のしようが無くなる。もちろんおれに絵のかき方を教えてくれた人もなければ、おれの絵を見てくれる人もない。岩内の町でのたった一人の話し相手のKは、おれの絵を見るたびごとに感心してくれる。そしてどんな苦しみを

経ても絵かきになれと勧めてくれる。しかしＫは第一おれの友だちだし、第二に絵がおれ以上にわかるとは思われぬ。Ｋの言葉はいつでもおれを励まし鞭うってくれる。しかしおれはいつでもそのあとに、うぬぼれさせられているのではないかという疑いを持たずにはいない。どうすればこの二重生活を突き抜ける事ができるのだろう。生まれから言っても、今までの運命から言っても、おれは漁夫で一生を終えるのが相当しているらしい。Ｋもあの気むずかしい父のもとで調剤師で一生を送る決心を悲しくもしてしまったらしい。おれから見るとＫこそは立派な文学者になれそうな男だ

けれども、Ｋは誇張なく自分の運命をあきらめている。悲しくもあきらめている。待てよ、悲しいというのはほんとうはＫの事ではない。そう思っているおれ自身の事だ。おれはほんとうに悲しい男だ。親父（おやじ）にも済まない。兄や妹にも済まない。この一生をどんなふうに過ごしたらおれはほんとうにおれらしい生き方ができるのだろう」

　そこに居ならんだ漁夫たちの間に、どっしりと男らしいがんじょうなあぐらを組みながら、君は彼らとは全く異邦の人のようなさびしい心持ちになって、こんなことを思いつづける。

やがて漁夫たちはそこらを片付けてやおら立ち上がると、胴の間に降り積んだ雪を摘まんで、手のひらで擦（こす）り合わせて、指に粘りついた飯粒を落とした。そして配縄（はいなわ）の引き上げにかかった。

西に舂（うすず）きだすと日あしはどんどん歩みを早める。おまけに上のほうからたるみなく吹き落として来る風に、海面は妙に弾力を持った凪（な）ぎ方をして、その上を霰（あられ）まじりの粉雪がさーっと来ては過ぎ、過ぎては来る。君たちは手袋を脱ぎ去った手をまっかにしながら、氷点以下の水でぐっしょりぬれた配縄をその一端からたぐり上げ始める。三間四間置きぐらいに、目の下二尺

もあるような鱈がぴちぴちはねながら引き上げられて来る。

三十町に余るくらいな配縄をすっかりたくしこんでしまうころには、海の上は少し墨汁を加えた牛乳のようにぼんやり暮れ残って、そこらにながめやられる漁船のあるものは、帆を張り上げて港を目ざしていたり、あるものはさびしい掛け声をなお海の上に響かせて、忙しく配縄を上げているのもある。夕暮れに海上に点々と浮かんだ小船を見渡すのは悲しいものだ。そこには人間の生活がそのはかない末梢をさびしくさらしているのだ。

君たちの船は、海風が凪（な）ぎて陸風に変わらないうちにと帆を立て、艪（ろ）を押して陸地を目がける。晴れては曇る雪時雨（ゆきしぐれ）の間に、岩内（いわない）の後ろにそびえる山々が、高いのから先に、水平線上に現われ出る。船歌をうたいつれながら、漁夫たちは見慣れた山々の頂をつなぎ合わせて、港のありかをそれとおぼろげながら見定める。そこには妻や母や娘らが、寒い浜風に吹きさらされながら、うわさとりどりに汀（みぎわ）に立って君たちの帰りを待ちわびているのだ。

　これも牛乳のような色の寒い夕靄（ゆうもや）に包まれた雷電峠の突角がいかつく大きく見えだすと、防波堤の突先（とっさき）に

ある灯台の灯(ひ)が明滅して船路を照らし始める。毎日の事ではあるけれども、それを見ると、君と言わず人々の胸の中には、きょうもまず命は無事だったという底深い喜びがひとりでにわき出して来て、陸に対する不思議なノスタルジヤが感ぜられる。漁夫たちの船歌は一段と勇ましくなって、君の父上は船の艫(とも)に漁獲を知らせる旗を揚げる。その旗がばたばたと風にあおられて音を立てる――その音がいい。

だんだん間近になった岩内の町は、黄色い街灯の灯(ひ)のほかには、まだ灯火もともさずに黒くさびしく横たわっている。雪のむら消えた砂浜には、けさと同様に

女たちがかしこここにいくつかの固い群れになって、石ころのようにこちんと立っている。白波がかすかな潮の香と音とをたてて、その足もとに行っては消え、行っては消えするのが見え渡る。

　帆がおろされた。船は海岸近くの波に激しく動揺しながら、艫を海岸のほうに向けかえてだんだんと汀（みぎわ）に近寄って行く。海産物会社の印袢天（しるしばんてん）を着たり、犬の皮か何かを裏につけた外套（がいとう）を深々と羽織ったりした男たちが、右往左往に走りまわるそのあたりを目がけて、君の兄上が手慣れたさばきでさっと艫綱（ともづな）を投げると、それがすぐ幾十人もの男女の手で引っぱられる。

船はしきりと上下する舳(へさき)に波のしぶきを食いながら、どんどん砂浜に近寄って、やがて疲れ切った魚のように黒く横たわって動かなくなる。

　漁夫たちは艪(ろ)や舵(かじ)や帆の始末を簡単にしてしまうと、舷(ふなべり)を伝わって陸におどり上がる。海産物製造会社の人夫たちは、漁夫たちと入れ替わって、船の中に猿(ましら)のように飛び込んで行く。そしてまだ死に切らない鱈(たら)の尾をつかんで、礫(こいし)のように砂の上にほうり出す。浜に待ち構えている男たちは、目にもとまらない早わざで数を数えながら、魚を畚(もっこ)の中にたたき込む。漁夫たちは吉例のように会社の数取(かずと)り人に対して何かと故

障を言いたててわめく。一日ひっそりかんとしていた浜も、このしばらくの間だけは、さすがににぎやかな気分になる。景気にまき込まれて、女たちの或(あ)る者まで男といっしょになってけんか腰に物を言いつのる。

しかしこのはなばなしいにぎわいも長い間ではない。命をなげ出さんばかりの険しい一日の労働の結果は、わずか十数分の間でたわいもなく会社の人たちに処分されてしまうのだ。君が君の妹を女たちの群れの中から見つけ出して、忙(せわ)しく目を見かわし、言葉をかわす暇もなく、浜の上には乱暴に踏み荒された砂と、海藻(かいそう)と小魚とが砂まみれになって残っているばかりだ。そ

して会社の人夫たちはあとをも見ずにまた他の漁船のほうへ走って行く。

こうして岩内じゅうの漁夫たちが一生懸命に捕獲して来た魚はまたたくうちにさらわれてしまって、墨のように煙突から煙を吐く怪物のような会社の製造所へと運ばれて行く。

夕焼けもなく日はとっぷりと暮れて、雪は紫に、灯は光なくただ赤くばかり見える初夜になる。君たちはけさのとおりに幾かたまりの黒い影になって、疲れ切った五体をめいめいの家路に運んで行く。寒気のために五臓まで締めつけられたような君たちは口をきく

のさえ物惰（ものう）くてできない。女たちがはしゃいだ調子で、その日のうちに陸の上で起こったいろいろな出来事――いろいろな出来事と言っても、きわだって珍しい事やおもしろい事は一つもない――を話し立てるのを、ぶっつり押し黙ったままで聞きながら歩く。しかしそれがなんという快さだろう。

しかし君の家が近くなるにつれて妙に君の心を脅かし始めるものがある。それは近年引き続いて君の家に起こった種々な不幸がさせるわざだ。長わずらいの後に夫に先立った君の母上に始まって、君の家族の周囲には妙に死というものが執念（しゅうね）くつきまつわっているよ

うに見えた。君の兄上の初生児も取られていた。汗水が凝り固まってできたような銀行の貯金は、その銀行が不景気のあおりを食って破産したために、水の泡（あわ）になってしまった。命とかけがえの漁場が、間違った防波堤の設計のために、全然役に立たなくなったのは前にも言ったとおりだ。こらえ性（しょう）のない人々の寄り集まりなら、身代が朽ち木のようにがっくりと折れ倒れるのはありがちと言わなければならない。ただ君の家では父上といい、兄上といい、根性（こんじょう）っ骨（ぽね）の強い正直な人たちだったので、すべての激しい運命を真正面から受け取って、骨身を惜しまず働いていたから、曲がっ

たなりにも今日今日を事欠かずに過ごしているのだ。しかし君の家を襲ったような運命の圧迫はそこいらじゅうに起こっていた。軒を並べて住みなしていると、どこの家にもそれ相当な生計が立てられているようだけれども、一軒一軒に立ち入ってみると、このごろの岩内の町には鼻を酸(す)くしなければならないような事がそこいらじゅうにまくしあがっていた。ある家は目に立って零落していた。あらしに吹きちぎられた屋根板が、いつまでもそのままで雨の漏れるに任せた所も少なくない。目鼻立ちのそろった年ごろの娘が、嫁入ったといううわさもなく姿を消してしまう家もあった。

立派に家框（いえがまち）が立ち直ったと思うとその家は代が替わったりしていた。そろそろと地の中に引きこまれて行くような薄気味の悪い零落の兆候が町全体にどことなく漂っているのだ。

　人々は暗々裏にそれに脅かされている。いつどんな事がまくし上がるかもしれない——そういう不安は絶えず君たちの心を重苦しく押しつけた。家から火事を出すとか、家から出さないまでも類焼の災難にあうとか、持ち船が沈んでしまうとか、働き盛りの兄上が死病に取りつかれるとか、鰊（にしん）の群来（くき）がすっかりはずれるとか、ワク船が流されるとか、いろいろに想像され

るこれらの不幸の一つだけに出くわしても、君の家にとっては、足腰の立たない打撃となるのだ。疲れた五体を家路に運びながら、そしてばかに建物の大きな割合に、それにふさわない暗い灯(ひ)でそこと知られる柾葺(まさぶ)きの君の生まれた家屋を目の前に見やりながら、君の心は運命に対する疑いのためにおくれがちになる。

それでも敷居(しきい)をまたぐと土間のすみの竈(かまど)には火が暖かい光を放って水飴(みずあめ)のようにやわらかく撓(しな)いながら燃えている。どこからどこまでまっ黒にすすけながら、ただだっ広い囲炉裏の間(ま)はきちんと片付けてあって、居心よさそうにしつらえてある。嫂(あによめ)や妹の心づくしを

君はすぐ感じてうれしく思いながら、持って帰った漁具――寒さのために凍り果てて、触れ合えば石のように音を立てる――をそれぞれの所に始末すると、これもからからと音を立てるほど凍り果てた仕事着を一枚一枚脱いで、竈のあたりに掛けつらねて、ふだん着に着かえる。一日の寒気に凍え切った肉体はすぐ熱を吹き出して、顔などはのぼせ上がるほどぽかぽかして来る。ふだん着の軽い暖かさ、一椀の熱湯の味のよさ。小気味のよいほどしたたか夕餉を食った漁夫たちが、

「親方さんお休み」

と挨拶してぞろぞろ出て行ったあとには、水入らずの

家族五人が、囲炉裏の火にまっかに顔を照らし合いながらさし向かいになる。戸外ではさらさらと音を立てて霰（あられ）まじりの雪が降りつづけている。七時というのにもうその界隈（かいわい）は夜ふけ同様だ。どこの家もしんとして赤子の泣く声が時おり聞こえるばかりだ。ただ遠くの遊郭のほうから、朝寝のできる人たちが寄り集まっているらしい酔狂のさざめきだけがとぎれとぎれに風に送られて伝わって来る。

「おらはあ寝まるぞ」

わずかな晩酌（ばんしゃく）に昼間の疲労を存分に発して、目をい、い、

とろんこにした君の父上が、まず囲炉裏のそばに床を

とらして横になる。やがて兄上と嫂（あによめ）とが次の部屋（へや）に退くと、囲炉裏のそばには、君と君の妹だけが残るのだ。

時が静かにさびしく、しかしむつまじくじりじりと過ぎて行く。

「寝ずに」

針の手をやめて、君の妹はおとなしく顔を上げながら君に言う。

「先に寝れ、いいから」

あぐらのひざの上にスケッチ帳を広げて、と見こう見している君は、振り向きもせずに、ぶっきらぼうに

そう答える。
「朝げにまた眠いとってこづき起こされべえに」にっ、と片頬（かたほお）に笑（え）みをたたえて妹は君にいたずらしい目を向ける。
「なんの」
「なんのでねえよ、そんだもの見こくってなんのたしになるべえさ。みんなよって笑っとるでねえか、※（やまさ）[#「仐」の「工」に代えて「サ」、屋号を示す記号、75-9]の兄（あん）さんこと暇さえあれば見ったくもない絵べえかいて、なんするだべってって」
君は思わず顔をあげる。

「だれが言った」

「だれって……みんな言ってるだよ」

「お前もか」

「私は言わねえ」

「そうだべさ。それならそれでいいでねえか。わけのわかんねえやつさなんとでも言わせておけばいいだ。これを見たか」

「見たよ。……荘園(しょうえん)の裏から見た所だなあそれは。山はわし気に入ったども、雲が黒すぎるでねえか」

「さし出口はおけやい」

そして君たち二人は顔を見合って溶けるように笑(え)み

かわす。寒さはしんしんと背骨まで徹（とお）って、戸外には風の落ちた空を黙って雪が降り積んでいるらしい。

今度は君が発意する。

「おい寝べえ」

「兄（あん）さん先に寝なよ」

「お前寝べし……あしたまた一番に起きるだから……戸締まりはおらがするに」

二人はわざと意趣（いしゅ）に争ってから、妹はとうとう先に寝る事にする。君はなお半時間ほどスケッチに見入っていたが、寒さにこらえ切れなくなってやがて身を起こすと、藁草履（わらぞうり）を引っかけて土間に降り立ち、竈（かまど）の火

もとを充分に見届け、漁具の整頓（せいとん）を一わたり注意し、入り口の戸に錠前をおろし、雪の吹きこまぬよう窓のすきまをしっかりと閉じ、そしてまた囲炉裏座に帰って見ると、ちょろちょろと燃えかすれた根粗朶（ねそだ）の火におぼろに照らされて、君の父上と妹とが炉縁（ろぶち）の二方に寝くるまっているのが物さびしくながめられる。一日一日生命の力から遠ざかって行く老人と、若々しい生命の力に悩まされているとさえ見える妹の寝顔は、明滅する炎の前に幻のような不思議な姿を描き出す。この老人の老い先をどんな運命が待っているのだろう。この処女（おとめ）の行く末をどんな運命が待っているのだろう。

未来はすべて暗い。そこではどんな事でも起こりうる。君は二人の寝顔を見つめながらつくづくとそう思った。そう思うにつけて、その人たちの行く末については、素直な心で幸(さち)あれかしと祈るほかはなかった。人の力というものがこんな厳粛な瞬間にはいちばんたよりなく思われる。

　君はスケッチ帳を枕(まくら)もとに引きよせて、垢(あか)じみた床の中にそのままもぐり込みながら、氷のような布団(ふとん)の冷たさがからだの温(ぬく)みで暖まるまで、まじまじと目を見開いて、君の妹の寝顔を、憐(あわ)れみとも愛ともつかぬ涙ぐましい心持ちでながめつづける。それは君が妹

に対して幼少の時から何かのおりに必ずいだくなつかしい感情だった。

それもやがて疲労の夢が押し包む。

今岩内の町に目ざめているものは、おそらく朝寝坊のできる富んだ惰(なま)け者と、灯台守(とうだいも)りと犬ぐらいのものだろう。夜は寒くさびしくふけて行く。

八

君、君はこんな私の自分勝手な想像を、私が文学者であるという事から許してくれるだろうか。私の想像

はあとからあとからと引き続いてわいて来る。それがあたっていようがあたっていまいが、君は私がこうして筆取るそのもくろみに悪意のない事だけは信じてくれるだろう。そして無邪気な微笑をもって、私の唯一の生命である空想が勝手次第に育って行くのを見守っていてくれるだろう。私はそれをたよってさらに書き続けて行く。

鰊(にしん)の漁期――それは北方に住む人の胸にのみしみじみと感ぜられるなつかしい季節の一つだ。この季節になると長く地の上を領していた冬が老いる。――北風も、雪も、囲炉裏も、綿入れも、雪鞋(つまご)も、等しく老

いる。一片の雲のたたずまいにも、自然のもくろみと予言とを人一倍鋭敏に見て取る漁夫たちの目には、朝夕の空の模様が春めいて来た事をまざまざと思わせる。北西の風が東に回るにつれて、単色に堅く凍りついていた雲が、蒸されるようにもやもやとくずれ出して、淡いながら暖かい色の晴れ雲に変わって行く。朝から風もなく晴れ渡った午後なぞに波打ちぎわに出て見ると、やや緑色を帯びた青空のはるか遠くの地平線高く、幔幕（まんまく）を真一文字に張ったような雪雲の堆積（たいせき）に日がさして、まんべんなくばら色に輝いている。なんという美妙な美しい色だ。冬はあすこまで遠のいて行ったのだ。

そう思うと、不幸を突き抜けて幸福に出あった人のみが感ずる、あの過去に対する寛大な思い出が、ゆるやかに浜に立つ人の胸に流れこむ。五か月の長い厳冬を牛のように忍耐強く辛抱しぬいた北人の心に、もう少しでひねくれた根性にさえなり兼ねた北人の心に、春の約束がほのぼのと恵み深く響き始める。

朝晩の凍(し)み方はたいして冬と変わりはない。ぬれた金物がべたべたと糊(のり)のように指先に粘りつく事は珍しくない。けれども日が高くなると、さすがにどこか寒さにひびがいる。浜べは急に景気づいて、納屋の中からは大釜(おおがま)や締框(しめわく)がかつぎ出され、ホック船やワク船を

つとのようにおおうていた蓆(むしろ)が取りのけられ、旅烏(たびがらす)といっしょに集まって来た漁夫たちが、綾(あや)を織るように雪の解けた砂浜を行き違って目まぐるしい活気を見せ始める。

鱈(たら)の漁獲がひとまず終わって、鰊(にしん)の先駆(はしり)もまだ群来(くけ)て来ない。海に出て働く人たちはこの間に少しの間(ま)息をつく暇を見いだすのだ。冬の間から一心にねらっていたこの暇に、君はある日朝からふいと家を出る。もちろんふところの中には手慣れたスケッチ帳と一本の鉛筆とを潜まして。

家を出ると往来には漁夫たちや、女でめん（女労働

者）や、海産物の仲買いといったような人々がにぎやかに浮き浮きして行ったり来たりしている。根雪が氷のように磐（いわ）になって、その上を雪解けの水が、一冬の塵埃（じんあい）に染まって、泥炭地（でいたんち）のわき水のような色でどぶどぶと漂っている。馬橇（ばそり）に材木のように大きな生々しい薪（まき）をしこたま積み載せて、その悪路を引っぱって来た一人の年配な内儀（かみ）さんは、君を認めると、引き綱をゆるめて腰を延ばしながら、戯れた調子で大きな声をかける。

「はれ兄（あん）さんもう浜さいくだね」

「うんにゃ」

「浜でねえ？　たらまた山かい。魚を商売にする人(ふと)が暇さえあれば山さ突っぱしるだから怪体(けたい)だあてばさ。いい人でもいるだんべさ。は、は、は、……。うんすら妬(や)いてこすに、一押し手を貸すもんだよ」

「口はばったい事べ言うと鯡様(にしんさま)が群来(くけ)てはくんねえぞ。おかしな婆様(ばさま)よなあお前も」

「婆様だ⁉　人聞(ふとぎ)きの悪い事べ言わねえもんだ。人様(ふとさま)が笑うでねえか」

　実際この内儀さんの噪(はしゃ)いだ雑言(ぞうごん)には往来の人たちがおもしろがって笑っている。君は当惑して、橇(そり)の後ろに回って三四間ぐんぐん押してやらなければならな

かった。
「そだ。そだ。兄(あん)さんいい力だ。浜まで押してくれたらおらお前に惚(ほ)れこすに」
君はあきれて橇から離れて逃げるように行く手を急ぐ。おもしろがって二人の問答を聞いていた群集は思わず一度にどっと笑いくずれる。人々のその高笑いの声にまじって、内儀さんがまただれかに話しかける大声がのびやかに聞こえて来る。
「春が来るのだ」
君は何につけても好意に満ちた心持ちでこの人たちを思いやる。

やがて漁師町をつきぬけて、この市街では目ぬきな町筋に出ると、冬じゅうあき屋になっていた西洋風の二階建ての雨戸が繰りあけられて、札幌（さっぽろ）のある大きなデパートメント・ストアの臨時出店が開かれようとしている。藁屑（わらくず）や新聞紙のはみ出た大きな木箱が幾個か店先にほうり出されて、広告のけばけばしい色旗が、活動小屋の前のように立てならべてある。そして気のきいた手代が十人近くも忙（いそが）しそうに働いている。君はこの大きな臨時の店が、岩内じゅうの小売り商人にどれほどの打撃であるかを考えながら、自分たちの漁獲が、資本のないために、ほかの土地から投資された

海産物製造会社によって捨て値で買い取られる無念さをも思わないではいられなかった。「大きな手にはつかまれる」……そう思いながら君はその店の角（かど）を曲がって割合にさびれた横町にそれた。

その横町を一町も行かない所に一軒の薬種店があって、それにつづいて小さな調剤所がしつらえてあった。君はそこのガラス窓から中をのぞいて見る。ずらっとならべた薬種びんの下の調剤卓の前に、もたれのない抉り抜き（くりぬき）の事務椅子（じむいす）に腰かけて、黒い事務マントを羽織った悒鬱（ゆううつ）そうな小柄な若い男が、一心に小形の書物に読みふけっている。それはKと言って、君が岩内の

町に持っているただ一人の心の友だ。君はくすんだガラス板に指先を持って行ってほとほととたたく。Ｋは機敏に書物から目をあげてこちらを振りかえる。そして驚いたように座を立って来てガラス障子をあける。

「どこに」

君は黙ったまま懐中からスケッチ帳を取り出して見せる。そして二人は互いに理解するようにほほえみかわす。

「君はきょうは出られまい」

君は東京の遊学時代を記念するために、だいじにとっておいた書生の言葉を使えるのが、この友だちに

会う時の一つの楽しみだった。

「だめだ。このごろは漁夫で岩内の人数が急にふえたせいか忙（せわ）しい。しかし今はまだ寒いだろう。手が自由に動くまい」

「なに、絵はかけずとも山を見ていればそれでいいだ。久しく出て見ないから」

「僕は今これを読んでいたが（と言ってKはミケランジェロの書簡集を君の目の前にさし出して見せた）すばらしいもんだ。こうしていてはいけないような気がするよ。だけどもとても及びもつかない。いいかげんな芸術家というものになっているより、この

薄暗い薬局で、黙りこくって一生を送るほうがやはり僕には似合わしいようだ」

　そう言って君の友は、悒鬱（ゆううつ）な小柄な顔をひときわ悒鬱にした。君は励ます言葉も慰める言葉も知らなかった。そして心とがめするもののようにスケッチ帳をふところに納めてしまった。

「じゃ行って来るよ」

「そうかい。そんなら帰りには寄って話して行きたまえ」

　この言葉を取りかわして、君はその薄よごれたガラス窓から離れる。

南へ南へと道を取って行くと、節婦橋という小さな木橋があって、そこから先にはもう家並みは続いていない。溝泥（どぶどろ）をこね返したような雪道はだんだんきれいになって行って、地面に近い所が水になってしまった積雪の中に、君の古い兵隊長靴（へいたいながぐつ）はややともするとすぽりすぽりと踏み込んだ。

雪におおわれた野は雷電峠のふもとのほうへ爪先上（つまさきあ）がりに広がって、おりから晴れ気味になった雲間を漏れる日の光が、地面の陰ひなたを銀と藍（あい）とでくっきりといろどっている。寒い空気の中に、雪の照り返しがかっかっと顔をほてらせるほど強くさして来る。君の

顔は見る見る雪焼けがしてまっかに汗ばんで来た。今までがんじょうにかぶっていた頭巾（ずきん）をはねのけると、眼界は急にはるばると広がって見える。

なんという広大なおごそかな景色だ。胆振（いぶり）の分水嶺から分かれて西南をさす一連の山波が、地平から力強く伸び上がってだんだん高くなりながら、岩内の南方へ走って来ると、そこに図らずも陸の果てがあったので、突然水ぎわに走りよった奔馬が、そろえた前脚（まえあし）を踏み立てて、思わず平頸（ひらくび）を高くそびやかしたように、山は急にそそり立って、沸騰せんばかりに天を摩している。今にもすさまじい響きを立ててくずれ落ちそう

に見えながら、何百万年か何千万年か、昔のままの姿でそそり立っている。そして今はただ一色の白さに雪でおおわれている。そして雲が空を動くたびごとに、山は居住まいを直したかのように姿を変える。君は久しぶりで近々とその山をながめるともう有頂天になった。そして余の事はきれいに忘れてしまう。

　君はただいちずにがむしゃらに本道から道のない積雪の中に足を踏み入れる。行く手に黒ずんで見える楡（にれ）の切り株の所まで腰から下まで雪にまみれてたどり着くと、君はそれに兵隊長靴（へいたいながぐつ）を打ちつけて足の雪を払い落としながらたたずむ。そして目を据（す）えてもう一度雪

野の果てにそびえ立つ雷電峠を物珍しくながめて魅入られたように茫然（ぼうぜん）となってしまう。幾度見てもあきる事のない山のたたずまいが、この前見た時と相違のあるはずはないのに、全くちがった表情をもって君の目に映って来る。この前見に来た時は、それは厳冬の一日のことだった。やはりきょうと同じ所に立って、凍える手に鉛筆を運ぶ事もできず、黙ったまま立って見ていたのだったが、その時の山は地面から静々と盛り上がって、雪雲に閉ざされた空を確（し）かとつかんでいるように見えた。その感じは恐ろしく執念深く力強いものだった。君はその前に立って押しひしゃげられるよ

うな威圧を感じた。きょう見る山はもっと素直な大きさと豊かさとをもって静かに君をかきいだくように見えた。ふだん自分の心持ちがだれからも理解されないで、一種の変屈人のように人々から取り扱われていた君には、この自然が君に対して求めて来る親しみはしみじみとしたものだった。君はまたさらに目をあげて、なつかしい友に向かうようにしみじみと山の姿をながめやった。

　ちょうど親しい心と心とが出あった時に、互いに感ぜられるような温（あたた）かい涙ぐましさが、君の雄々しい胸の中にわき上がって来た。自然は生きている。そし

て人間以上に強く高い感情を持っている。君には同じ人間の語る言葉だが英語はわからない。自然の語る言葉は英語よりもはるかに君にはわかりいい。ある時には君が使っている日本語そのものよりももっと感情の表現の豊かな平明な言葉で自然が君に話しかける。君はこの涙ぐましい心持ちを描いてみようとした。

そして懐中からいつものスケッチ帳を取り出して切り株の上に置いた。開かれた手帖と山とをかたみがわりに見やりながら、君は丹念に鉛筆を削り上げた。そして粗末な画学紙の上には、たくましく荒くれた君の手に似合わない繊細な線が描かれ始めた。

ちょうど人の肖像をかこうとする画家が、その人の耳目鼻口をそれぞれ綿密に観察するように、君は山の一つの皺（しわ）一つの襞（ひだ）にも君だけが理解すると思える意味を見いだそうと努めた。実際君の目には山のすべての面は、そのまますべての表情だった。日光と雲との明暗（キャロスキュロ）にいろどられた雪の重なりには、熱愛をもって見きわめようと努める人々にのみ説き明かされる貴（たっと）いなぞが潜めてあった。君は一つのなぞを解き得たと思うごとに、小おどりしたいほどの喜びを感じた。君の周囲には今はもう生活の苦情もなかった。世間に対する不安も不幸もなかった。自分自身に対するおく

れがちな疑いもなかった。子供のような快活な無邪気な一本気な心……君のくちびるからは知らず知らず軽い口笛が漏れて、君の手はおどるように調子を取って、紙の上を走ったり、山の大きさや角度を計ったりした。

　そうして幾時間が過ぎたろう。君の前には「時」というものさえなかった。やがて一つのスケッチができあがって、軽い満足のため息とともに、働かし続けていた手をとめて、片手にスケッチ帳を取り上げて目の前に据えた時、君は軽い疲労――軽いと言っても、君が船の中で働く時の半日分の労働の結果よりは軽くない――を感じながら、きょうが仕事のよい収穫であれ

かしと祈った。画学紙の上には、吹き変わる風のために乱れがちな雲の間に、その頂を見せたり隠したりしながら、まっ白にそそり立つ峠の姿と、その手前の広い雪の野のここかしこにむら立つ針葉樹の木立ちや、薄く炊煙を地になびかしてところどころに立つ惨(みじ)めな農家、これらの間を鋭い刃物で断ち割ったような深い峡間(はざま)、それらが特種な深い感じをもって特種な筆触で描かれている。君はややしばらくそれを見やってほほえましく思う。久しぶりで自分の隠れた力が、哀れな道具立てによってではあるが、とにかく形を取って生まれ出たと思うとうれしいのだ。

しかしながら狐疑（こぎ）は待ちかまえていたように、君が満足の心を充分味わう暇もなく、足もとから押し寄せて来て君を不安にする。君は自分にへつらうものに対して警戒の眼を向ける人のように、自分の満足の心持ちをきびしく調べてかかろうとする。そして今かき上げた絵を容赦なく山の姿とくらべ始める。

　自分が満足だと思ったところはどこにあるのだろう。それはいわば自然の影絵に過ぎないではないか。向こうに見える山はそのまま寛大と希望とを象徴するような一つの生きた塊的（マッス）であるのに、君のスケッチ帳に縮め込まれた同じものの姿は、なんの表情も持たない線

と面との集まりとより君の目には見えない。

　この悲しい事実を発見すると君は躍起となって次のページをまくる。そして自分の心持ちをひときわ謙遜（けんそん）な、そして執着の強いものにし、粘り強い根気でどうかして山をそのまま君の画帖（がじょう）の中に生かし込もうとする、新たな努力が始まると、君はまたすべての事を忘れ果てて一心不乱に仕事の中に魂を打ち込んで行く。そして君が昼弁当を食う事も忘れて、四枚も五枚ものスケッチを作った時には、もうだいぶ日は傾いている。

　しかしとてもそこを立ち去る事はできないほど、自然は絶えず美しくよみがえって行く。朝の山には朝の

命が、昼の山には昼の命があった。夕方の山にはまたしめやかな夕方の山の命がある。山の姿は、その線と陰日向（かげひなた）とばかりでなく、色彩にかけても、日が西に回るとすばらしい魔術のような不思議を現わした。峠のある部分は鋼鉄のように寒くかたく、また他の部分は気化した色素のように透明で消えうせそうだ。夕方に近づくにつれて、やや煙り始めた空気の中に、声も立てずに粛然とそびえているその姿には、くんでもくんでも尽きない平明な神秘が宿っている。見ると山の八合目と覚しい空高く、小さな黒い点が静かに動いて輪を描いている。それは一羽の大鷲（おおわし）に違いない。目を定

めてよく見ると、長く伸ばした両の翼を微塵（みじん）も動かさずに、からだ全体をやや斜めにして、大きな水の渦（うず）に乗った枯れ葉のように、その鷲は静かに伸びやかに輪を造っている。山が物言わんばかりに生きてると見える君の目には、この生物はかえって死物のように思いなされる。ましてや平原のところどころに散在する百姓家などは、山が人に与える生命の感じにくらべれば、惨（みじ）めな幾個かの無機物に過ぎない。

昼は真冬からは著しく延びてはいるけれども、もう夕暮れの色はどんどん催して来た。それとともに肌身（はだみ）に寒さも加わって来た。落日にいろどられて光を呼吸

するように見えた雲も、煙のような白と淡藍（うすあい）との陰日向を見せて、雲とともに大空の半分を領していた山も、見る見る寒い色に堅くあせて行った。そして靄（もや）とも言うべき薄い膜（まく）が君と自然との間を隔てはじめた。

　君は思わずため息をついた。言い解きがたい暗愁――それは若い人が恋人を思う時に、その恋が幸福であるにもかかわらず、胸の奥に感ぜられるような――が不思議に君を涙ぐましくした。君は鼻をすりながら、ばたんと音を立ててスケッチ帳を閉じて、鉛筆といっしょにそれをふところに納めた。凍（い）てた手はふところの中の温（ぬく）みをなつかしく感じた。弁当は食う気がしな

いで、切り株の上からそのまま取って腰にぶらさげた。半日立ち尽くした足は、動かそうとすると電気をかけられたようにしびれていた。ようようの事で君は雪の中から爪先（つまさき）をぬいて一歩一歩本道のほうへ帰って行った。はるか向こうを見ると山から木材や薪炭（しんたん）を積みおろして来た馬橇（ばそり）がちらほらと動いていて、馬の首につけられた鈴の音がさえた響きをたててかすかに聞こえて来る。それは漂浪の人がはるかに故郷の空を望んだ時のようななつかしい感じを与える。その消え入るような、さびしい、さえた音がことになつかしい。不思議な誘惑の世界から突然現世に帰った人のように、君

の心はまだ夢ごこちで、芸術の世界と現実の世界との淡々しい境界線をたどっているのだ。そして君は歩きつづける。

いつのまにか君は町に帰って例の調剤所の小さな部屋(へや)で、友だちのKと向き合っている。Kは君のスケッチ帳を興奮した目つきでかしこここ見返している。

「寒かったろう」

とKが言う。君はまだほんとうに自分に帰り切らないような顔つきで、

「うむ。……寒くはなかった。……その線の鈍ってい

るのは寒かったからではないんだ」
と答える。
「鈍っていはしない。君がすっかり何もかも忘れてしまって、駆けまわるように鉛筆をつかった様子がよく見えるよ。きょうのはみんな非常に僕の気に入ったよ。君も少しは満足したろう」
「実際の山の形にくらべて見たまえ。……僕は親父(おやじ)にも兄貴にもすまない」
と君は急いで言いわけをする。
「なんで？」
Kはけげんそうにスケッチ帳から目を上げて君の顔

をしげしげと見守る。

　君の心の中には苦(にが)い灰汁(あくじる)のようなものがわき出て来るのだ。漁にこそ出ないが、ほんとうを言うと、漁夫の家には一日として安閑としていい日とてはないのだ。きょうも、君が一日を絵に暮らしていた間に、君の家では家じゅうで忙(いそが)しく働いていたのに違いないのだ。建網(たてあみ)に損じの有る無し、網をおろす場所の海底の模様、大釜(おおがま)を据(す)えるべき位置、桟橋(さんばし)の改造、薪炭(しんたん)の買い入れ、米塩の運搬、仲買い人との契約、肥料会社との交渉……そのほか鰊漁(にしんりょう)の始まる前に漁場の持ち主がしておかなければならない事は有り余るほどあるのだ。

君は自分が絵に親しむ事を道楽だとは思っていない。いないどころか、君にとってはそれは、生活よりもさらに厳粛な仕事であるのだ。しかし自然と抱き合い、自然を絵の上に生かすという事は、君の住む所では君一人だけが知っている喜びであり悲しみであるのだ。ほかの人たちは——君の父上でも、兄妹（きょうだい）でも、隣近所の人でも——ただ不思議な子供じみた戯れとよりそれを見ていないのだ。君の考えどおりをその人たちの頭の中にたんのうができるように打ちこむというのは思いも及ばぬ事だ。

君は理屈ではなんら恥ずべき事がないと思っている。

しかし実際では決してそうは行かない。芸術の神聖を信じ、芸術が実生活の上に玉座を占むべきものであるのを疑わない君も、その事がらが君自身に関係して来ると、思わず知らず足もとがぐらついて来るのだ。

「おれが芸術家でありうる自信さえできれば、おれは一刻の躊躇（ちゅうちょ）もなく実生活を踏みにじっても、親しいものを犠牲にしても、歩み出す方向に歩み出すのだが……家の者どもの実生活の真剣さを見ると、おれは自分の天才をそうやすやすと信ずる事ができなくなってしまうんだ。おれのようなものをかいていながら彼らに芸術家顔をする事が恐ろしいばかりでなく、僭越（せんえつ）な

事に考えられる。おれはこんな自分が恨めしい、そして恐ろしい。みんなはあれほど心から満足して今日今日を暮らしているのに、おれだけはまるで陰謀でもたくらんでいるように始終暗い心をしていなければならないのだ。どうすればこの苦しさこのさびしさから救われるのだろう」

平常のこの考えがKと向かい合っても頭から離れないので、君は思わず「親父にも兄貴にもすまない」と言ってしまったのだ。

「どうして？」と言ったKも、君もそのまま黙ってしまった。Kには、物を言われないでも、君の心はよく

わかっていたし、君はまた君で、自分はきれいにあきらめながらどこまでも君を芸術の捧誓者(ほうせいしゃ)たらしめたいと熱望する、Kのさびしい、自己を滅した、温(あたた)かい心の働きをしっくりと感じていたからだ。

君ら二人の目は悒鬱(ゆううつ)な熱に輝きながら、互いに瞳(ひとみ)を合わすのをはばかるように、やや燃えかすれたストーブの火をながめ入る。

そうやって黙っているうちに君はたまらないほどさびしくなって来る。自分を憐(あわ)れむともKを憐れむとも知れない哀情がこみ上げて、Kの手を取り上げてなでてみたい衝動を幾度も感じながら、女々(めめ)しさを退ける

ようにむずかゆい手を腕の所で堅く組む。

ふとすすけた天井からたれ下がった電球が光を放った。驚いて窓から見るともう往来はまっ暗になっている。冬の日の舂(うすず)き隠れる早さを今さらに君はしみじみと思った。掃除(そうじ)の行き届かない電球はごみと手あかとでことさら暗かった。それが部屋(へや)の中をなお悒鬱(ゆううつ)にして見せる。

「飯だぞ」

Ｋの父の荒々しいかん走った声が店のほうからいかにもつっけんどんに聞こえて来る。ふだんから自分の一人むすこの悪友でもあるかのごとく思いなして、君

が行くとかってきげんのいい顔を見せた事のないその父らしい声だった。Ｋはちょっと反抗するような顔つきをしたが、陰性なその表情をますます陰性にしただけで、きぱきぱと盾（たて）をつく様子もなく、父の心と君の心とをうかがうように声のするほうと君のほうとを等分に見る。

　君は長座をしたのがＫの父の気にさわったのだと推すると座を立とうとした。しかしＫはそういう心持ちに君をしたのを非常に物足らなく思ったらしく、君にもぜひ夕食をいっしょにしろと勧めてやまなかった。

「じゃ僕は昼の弁当を食わずにここに持ってるからこ

こで食おうよ。遠慮なく済まして来たまえ」
と君は言わなければならなかった。

Ｋは夕食を君に勧めながら、ほんとうはそれを両親に打ち出して言う事を非常に苦にしていたらしく、さればとてまずい心持ちで君をかえすのも堪えられないと思いなやんでいたらしかったので、君の言葉を聞くと活路を見いだしたように少し顔を晴れ晴れさせて調剤室を立って行った。それも思えば一家の貧窮がＫの心に染み渡ったしるしだった。君はひとりになると、だんだん暗い心になりまさるばかりだった。

それでも夕飯という声を聞き、戸のすきから漏れる

焼きざかなのにおいをかぐと、君は急に空腹を感じだした。そして腰に結び下げた弁当包みを解いてストーブに寄り添いながら、椅子（いす）に腰かけたままのひざの上でそれを開いた。

　北海道には竹がないので、竹の皮の代わりにへぎで包んだ大きな握り飯はすっかり凍（い）てしまっている。春立（はるだ）った時節とは言いながら一日寒空に、切り株の上にさらされていたので、飯粒は一粒一粒ぼろぼろに固くなって、持った手の中からこぼれ落ちる。試みに口に持って行ってみると米の持つうまみはすっかり奪われていて、無味な繊維のかたまりのような触覚だけが

冷たく舌に伝わって来る。

君の目からは突然、君自身にも思いもかけなかった熱い涙がほろほろとあふれ出た。じっとすわったままではいられないような寂寥（せきりょう）の念がまっ暗に胸中に広がった。

君はそっと座を立った。そして弁当を元どおりに包んで腰にさげ、スケッチ帳をふところにねじこむと、こそこそと入り口に行って長靴（ながぐつ）をはいた。靴の皮は夕方の寒さに凍（こお）って、鉄板のように堅く冷たかった。

雪は燐（りん）のようなかすかな光を放って、まっ黒に暮れ果てた家々の屋根をおおうていた。さびしいこの横町

は人の影も見せなかった。しばらく歩いて例のデパートメント・ストアの出店の角(かど)近くに来ると、一人の男の子がスケート下駄(げた)（下駄の底にスケートの歯をすげたもの）をはいて、でこぼこに凍った道の上をがりがりと音をさせながら走って来た。その子はスケートに夢中になって、君のそばをすりぬけても君には気がついていないらしい。

「氷の上がすべれだした時はほんとに夢中になるものだ」

　君は自分の遠い過去をのぞき込むようにさびしい心の中にもこう思う。何事を見るにつけても君の心は痛

んだ。
デパートメント・ストアのある本通りに出ると打って変わってにぎやかだった。電灯も急に明るくなったように両側の家を照らして、そこには店の者と購買者との影が綾（あや）を織った。それは君にとっては、その場合の君にとっては、一つ一つ見知らぬものばかりのようだった。そこいらから起こる人声や荷橇（にぞり）の雑音などがぴんぴんと君の頭を針のように刺激する。見物の前に引き出された見世物小屋の野獣のようないらだたしさを感じて、君は眉根（まゆね）の所に電光のように起こる痙攣（けいれん）を小うるさく思いながら、むずかしい顔をしてさっさと

にぎやかな往来を突きぬけて漁師町（りょうしまち）のほうへ急ぐ。

しかし君の家が見えだすと君の足はひとりでにゆるみがちになって、君の頭は知らず知らず、なお低くうなだれてしまった。そして君は疑わしそうな目を時々上げて、見知り越しの顔にでもあいはしないかと気づかった。しかしこの界隈（かいわい）はもう静まり返っていた。

「だめだ」

突然君はこう小さく言って往来のまん中に立ちどまってしまった。そうして立ちすくんだその姿の首から肩、肩から背中に流れる線は、もしそこに見守る人がいたならば、思わずぞっとして異常な憂愁と力とを

感ずるに違いない不思議に強い表現を持っていた。

しばらく釘（くぎ）づけにされたように立ちすくんでいた君は、やがて自分自身をもぎ取るように決然と肩をそびやかして歩きだす。

君は自分でもどこをどう歩いたかしらない。やがて君が自分に気がついて君自身を見いだした所は海産物製造会社の裏の険しい崕（がけ）を登りつめた小山の上の平地だった。

全く夜になってしまっていた。冬は老いて春は来ない――その壊（こわ）れ果てたような荒涼たる地の上高く、寒さをかすかな光にしたような雲のない空が、息もつか

ずに、凝然として延び広がっていた。いろいろな光度といろいろな光彩でちりばめられた無数の星々の間に、冬の空の誇りなる参宿（オライオン）が、微妙な傾斜をもって三つならんで、何かの凶徴のようにひときわぎらぎらと光っていた。星は語らない。ただはるかな山すそから、干潮になった無月の潮騒（しおざい）が、海妖（かいよう）の単調な誘惑の歌のように、なまめかしくなでるように聞こえて来るばかりだ。風が落ちたので、凍りついたように寒く沈み切った空気は、この海のささやきのために鈍く震えている。

君はその平地の上に立ってぼんやりあたりを見回し

ていた。君の心の中にはさきほどから恐ろしい企図（たくらみ）が目ざめていたのだ。それはきょうに始まった事ではない。ともすれば君の油断を見すまして、泥沼（どろぬま）の中からぬるりと頭を出す水の精のように、その企図は心の底から現われ出るのだ。君はそれを極端に恐れもし、憎みもし、卑しみもした。男と生まれながら、そんな誘惑を感ずる事さえやくざな事だと思った。しかしいったんその企図が頭をもたげたが最後、君は魅入られた者のように、もがき苦しみながらも、じりじりとそれを成就するためには、すべてを犠牲にしても悔いないような心になって行くのだ、その恐ろしい企図（たくらみ）とは自

殺する事なのだ。
　君の心は妙にしいんと底冷えがしたようにとげとげしく澄み切って、君の目に映る外界の姿は突然全く表情を失ってしまって、固い、冷たい、無慈悲な物の積み重なりに過ぎなかった。無際限なただ一つの荒廃——その中に君だけが呼吸を続けている、それがたまらぬほどさびしく恐ろしい事に思いなされる荒廃が君の上下四方に広がっている。波の音も星のまたたきも、夢の中の出来事のように、君の知覚の遠い遠い末梢（まっしょう）に、感ぜられるともなく感ぜられるばかりだった。すべての現象がてんでんばらばらに互いの連絡なく散らばっ

てしまった。その中で君の心だけが張りつめて死のほうへとじりじり深まって行こうとした。重錘（おもり）をかけて深い井戸に投げ込まれた灯明のように、深みに行くほど、君の心は光を増しながら、感じを強めながら、最後には死というその冷たい水の表面に消えてしまおうとしているのだ。

　君の頭がしびれて行くのか、世界がしびれて行くのか、ほんとうにわからなかった。恐ろしい境界に臨んでいるのだと幾度も自分を警（いまし）めながら、君は平気な気持ちでとてつもないのんきな事を考えたりしていた。そして君は夜のふけて行くのも、寒さの募るのも忘れ

てしまって、そろそろと山鼻のほうへ歩いて行った。
足の下遠く黒い岩浜が見えて波の遠音が響いて来る。ただ一飛びだ。それで煩悶（はんもん）も疑惑もきれいさっぱり帳消しになるのだ。

「家（うち）の者たちはほんとうに気が違ってしまったとでも思うだろう。……頭が先にくだけるかしらん。足が先に折れるかしらん」

君はまたたきもせずにぼんやり崖（がけ）の下をのぞきこみながら、他人の事でも考えるように、そう心の中でつぶやく。

不思議なしびれはどんどん深まって行く。波の音な

ども少しずつかすかになって、耳にはいったりはいらなかったりする。君の心はただだいちずに、眠り足りない人が思わず瞼（まぶた）をふさぐように、崖（がけ）の底を目がけてまろび落ちようとする。あぶない・・・あぶない・・・他人の事のように思いながら、君の心は君の肉体を崖（がけ）のきわからまっさかさまに突き落とそうとする。

　突然君ははね返されたように正気に帰って後ろに飛びすざった。耳をつんざくような鋭い音響が君の神経をわななかしたからだ。

　ぎょっと驚いて今さらのように大きく目を見張った君の前には平地から突然下方に折れ曲がった崖の縁（へり）が、

地球の傷口のように底深い口をあけている。そこに知らず知らず近づいて行きつつあった自分を省みて、君は本能的に身の毛をよだてながら正気になった。

鋭い音響は目の下の海産物製造会社の汽笛だった。十二時の交代時間になっていたのだ。遠い山のほうからその汽笛の音はかすかに反響（こだま）になって、二重にも三重にも聞こえて来た。

もう自然はもとの自然だった。いつのまにか元どおりな崩壊したようなさびしい表情に満たされて涯（はて）もなく君の周囲に広がっていた。君はそれを感ずると、ひたと底のない寂寥（せきりょう）の念に襲われだした。男らしい君

の胸をぎゅっと引きしめるようにして、熱い涙がとめどなく流れ始めた。君はただひとり真夜中の暗やみの中にすすり上げながら、まっ白に積んだ雪の上にうずくまってしまった、立ち続ける力さえ失ってしまって。

九

君よ‼

この上君の内部生活を忖度（そんたく）したり揣摩（しま）したりするのは僕のなしうるところではない。それは不可能であるばかりでなく、君を瀆（けが）すと同時に僕自身を瀆す事だ。

君の談話や手紙を総合した僕のこれまでの想像は謬(あやま)っていない事を僕に信ぜしめる。しかし僕はこの上の想像を避けよう。ともかく君はかかる内部の葛藤(かっとう)の激しさに堪えかねて、去年の十月にあのスケッチ帳と真率な手紙とを僕に送ってよこしたのだ。

　君よ。しかし僕は君のために何をなす事ができようぞ。君とお会いした時も、君のような人が——全然都会の臭味から免疫されて、過敏な神経や過量な人為的知見にわずらわされず、強健な意力と、強靭(きょうじん)な感情と、自然に哺(はぐく)まれた叡智(えいち)とをもって自然を端的に見る事のできる君のような土の子が——芸術の捧誓者(ほうせいしゃ)となっ

てくれるのをどれほど望んだろう。けれども僕の喉(のど)まで出そうになる言葉をしいておさえて、すべてをなげうって芸術家になったらいいだろうとは君に勧めなかった。

それを君に勧めるものは君自身ばかりだ。君がただひとりで忍ばなければならない煩悶(はんもん)――それは痛ましい陣痛の苦しみであるとは言え、それは君自身の苦しみ、君自身で癒(いや)さなければならぬ苦しみだ。

地球の北端――そこでは人の生活が、荒くれた自然の威力に圧倒されて、瘦地(やせじ)におとされた雑草の種のように弱々しく頭をもたげてい、人類の活動の中心から

は見のがされるほど隔たった地球の北端の一つの地角に、今、一つのすぐれた魂は悩んでいるのだ。もし僕がこの小さな記録を公にしなかったならばだれもこのすぐれた魂の悩みを知るものはないだろう。それを思うとすべての現象は恐ろしい神秘に包まれて見える。いかなる結果をもたらすかもしれない恐ろしい原因は地球のどのすみっこにも隠されているのだ。人はおそれないではいられない。

君が一人の漁夫として一生をすごすのがいいのか、一人の芸術家として終身働くのがいいのか、僕は知らない。それを軽々しく言うのはあまりに恐ろしい事だ。

それは神から直接君に示されなければならない。僕はその時が君の上に一刻も早く来るのを祈るばかりだ。

　そして僕は、同時に、この地球の上のそこここに君と同じい疑いと悩みとを持って苦しんでいる人々の上に最上の道が開けよかしと祈るものだ。このせつなる祈りの心は君の身の上を知るようになってから僕の心の中にことに激しく強まった。

　ほんとうに地球は生きている。生きて呼吸している。この地球の生まんとする悩み、この地球の胸の中に隠れて生まれ出ようとするものの悩み――それを僕はしみじみと君によって感ずる事ができる。それはわきい

で跳(おど)り上がる強い力の感じをもって僕を涙ぐませる。
君よ！　今は東京の冬も過ぎて、梅が咲き椿(つばき)が咲くようになった。太陽の生み出す慈愛の光を、地面は胸を張り広げて吸い込んでいる。春が来るのだ。
君よ、春が来るのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春がほほえめよかし……僕はただそう心から祈る。
（一九一八年四月、大阪毎日新聞に一部所載）

底本：「小さき者へ・生まれいずる悩み」岩波文庫、岩波書店
　　１９４０（昭和15）年３月26日第１刷発行
　　１９６２（昭和37）年10月16日第26刷改版発行
　　１９９８（平成10）年４月６日第71刷改版発行
底本の親本：「生れ出る悩み」叢文閣
　　１９１８（大正7）年9月初版発行
※底本には「本書は初版本を底本として、これを文庫編集部において現代表記に改めたものである。」との付記がある。
入力：土田一柄

校正：丹羽倫子
２０００年10月10日公開
２００５年11月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。